

日田市埋蔵文化財調査報告書第101集

祇園原遺跡Ⅱ
(近世墓編2)

祇園原遺跡Ⅱ

(近世墓編2)

日田市埋蔵文化財調査報告書第101集

2011年

日田市教育委員会

2011年

日田市教育委員会

序 文

大分県日田市は、市街地のある小さな盆地を中心として、それを取り囲む山林が市域の85%を占める山間都市です。この地形的特性を生かした林業は「日田杉」というブランドを創出し、「秋田杉」「吉野杉」とともに日本三大美林として広く知られ、近代以降の日田の経済を支えてまいりました。しかし90年代初頭のバブル崩壊により当市の林業も大打撃を受け、この基幹産業を守るべく計画されたウッドコンビナート（日田高度総合木材加工団地）は、現在では日田の木材の一大集積地としての機能を担いつつ、廃材等を利用した木質バイオマス発電施設も稼動するなど、産業の発展と環境保全の両立を推進しております。

本書はこのウッドコンビナート建設事業に伴い発掘調査を実施した有田塚ヶ原遺跡群のひとつ、祇園原遺跡の調査内容の一部を引き続きまとめたものです。この調査では、弥生時代から古墳時代に営まれた集落と江戸時代の墓地が見つっていますが、今回は江戸時代の墓地について報告いたします。

貴重な遺跡の調査成果をまとめました本書が、文化財の保護や地域の歴史などの普及啓発に、また学術研究等にご活用いただければ幸いです。

最後になりましたが、調査にご協力いただきました関係者の方々、また寒暖なく現場での作業および遺物の整理作業に従事いただきました方々に対して、心から厚くお礼を申し上げます。

平成23年3月

日田市教育委員会

教育長 合原 多賀雄

例 言

1. 本書は、市林政課（当時）が計画・実施したウッドコンビナート建設推進事業に先立ち、平成6～9年度に市教育委員会が実施した有田塚ヶ原遺跡群発掘調査のうち、平成7～8年度に実施した祇園原遺跡の発掘調査報告書の第4分冊（近世墓編2）であり、ウッドコンビナート建設推進事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書の7冊目にあたる。第1分冊は「祇園原遺跡Ⅱ（弥生・古墳時代遺構編）」として平成18年度に、第2分冊は『祇園原遺跡Ⅱ（弥生・古墳時代遺物編）』として平成19年度に、第3分冊は『祇園原遺跡Ⅱ（近世墓編1）』として平成21年度に刊行済である。
2. 調査にあたっては、市林政課（当時）、工事関係者、大分県教育委員会および地元の方々にはさまざまなご協力をいただいた。記して感謝申し上げます。
3. 本書に掲載した遺構実測は調査担当者が行い、人骨の実測・取り上げは九州大学大学院比較社会文化研究院基層構造講座の田中良之教授に依頼した。
4. 遺構の写真は、調査担当者が行ったものを使用したほか、一部九州大学が撮影した写真を借用させていただいた。
5. 製図は株式会社埋蔵文化財サポートシステム大分支店に委託し、その成果品を使用した。
6. 調査にかかる図面・写真類は、日田市埋蔵文化財センターにて保管している。
7. 人骨の分析・処理保管等については、九州大学大学院比較社会文化研究院基層構造講座の田中良之教授に依頼し、舟橋京子研究員や高橋浩史氏をはじめとした大学院生諸氏等に多大なるご尽力を頂いた。
8. 本書の執筆は、IV(3)を行時志郎（日田市立博物館）が行ったほか、IV(2)を田中良之教授（九州大学）に依頼し玉稿を賜った。それ以外は渡邊が行った。
9. 本書の編集は行時桂子の協力のもと渡邊隆行が行った。



日田市の位置

本文目次

はじめに

(1) 祇園原遺跡の調査の概要	1
(2) 調査組織	1
IV 近世墓の調査	
(1) 墓石の記録と概要	2
(2) 大分県日田市所在の祇園原遺跡から出土した近世人骨について	
1. はじめに	8
2. 人骨の出土状態	8
3. 人骨所見	15
4. まとめ	32
5. おわりに	35
(3) 小結	56

挿図目次

第1図 近世墓群遺構配置図 (1/50)	3~4
第2図 墓石実測図① (1/8, 1/20)	5
第3図 墓石実測図② (1/8, 1/20)	6
第4図 主成分分析 (男性, 10項目)	42
第5図 主成分分析 (女性, 9項目)	42
第6図 墓群グループ配置図 (1/200)	55

表目次

表1 頭蓋計測値の比較 (男性)	37
表2 主要下顎骨計測値の比較 (男性)	37
表3 頭蓋計測値の比較 (女性)	38
表4 主要下顎骨計測値の比較 (女性)	38
表5 上肢の計測値の比較 (男性)	39
表6 上肢の計測値の比較 (女性)	39
表7 下肢の計測値の比較 (男性)	40
表8 下肢の計測値の比較 (女性)	40
表9 主成分分析の固有ベクトル (男性)	41
表10 主成分分析の固有ベクトル (女性)	41
表11 身長と比較	41

本文写真目次

本文写真1 (P43)	① 1号頭蓋骨 (正面観)
	② 1号頭蓋骨 (側面観)
	③ 1号頭蓋骨 (上面観)
	④ 2号頭蓋骨 (正面観)
	⑤ 2号頭蓋骨 (側面観)
	⑥ 2号頭蓋骨 (上面観)
本文写真2 (P44)	① 3号頭蓋骨 (正面観)
	② 3号頭蓋骨 (側面観)
	③ 3号頭蓋骨 (上面観)
本文写真3 (P45)	④ 14号頭蓋骨 (正面観)
	⑤ 14号頭蓋骨 (側面観)
	⑥ 14号頭蓋骨 (上面観)
	① 24号頭蓋骨 (正面観)
	② 24号頭蓋骨 (側面観)
	③ 24号頭蓋骨 (上面観)
	④ 37号頭蓋骨 (正面観)
	⑤ 37号頭蓋骨 (側面観)
⑥ 37号頭蓋骨 (上面観)	

本文写真目次

- 本文写真4 (P 46)
- ①40号頭蓋骨 (正面観)
 - ②40号頭蓋骨 (側面観)
 - ③40号頭蓋骨 (上面観)
 - ④41号頭蓋骨 (正面観)
 - ⑤41号頭蓋骨 (側面観)
 - ⑥41号頭蓋骨 (上面観)
- 本文写真5 (P 47)
- ①24号頭蓋骨 (正面観)
 - ②1号下顎
 - ③9号下顎
 - ④11号下顎
 - ⑤15号下顎
 - ⑥25号下顎
 - ⑦39号下顎
- 本文写真6 (P 48)
- ①1号上肢骨
 - ②2号上肢骨
 - ③2号下肢骨
 - ④3号下肢骨
- 本文写真7 (P 49)
- ①4号下肢骨
 - ②9号上肢骨
 - ③9号下肢骨
 - ④11号上肢骨
- 本文写真8 (P 50)
- ①11号下肢骨
 - ②14号上肢骨
 - ③14号下肢骨
 - ④15号下肢骨
- 本文写真9 (P 51)
- ①20号上肢骨
 - ②20号下肢骨
 - ③39号上肢骨
 - ④39号下肢骨
- 本文写真10 (P 52)
- ①40号上肢骨
 - ②40号下肢骨
 - ③41号上肢骨
 - ④41号下肢骨
- 本文写真11 (P 53)
- ①50号上肢骨
 - ②50号下肢骨
 - ③51号下肢骨
- 本文写真12 (P 54)
- ①14号肋骨・胸骨由癒合
 - ②41号下腿遠位部骨膜炎
 - ③51号大腿小骨結節
 - ④51号椎骨リッピング

写真図版目次

- 図版 1
- ① 近世墓調査前風景 1
 - ② 近世墓調査前風景 2
 - ③ 近世墓調査前風景 3
 - ④ 近世墓調査前風景 4
 - ⑤ 近世墓調査前風景 5
 - ⑥ 近世墓調査前風景 6
 - ⑦ 近世墓遺構検出状況
 - ⑧ 近世墓遺構検出状況
- 図版 2
- ① 1号墓石
 - ② 1号墓石側面
 - ③ 2号墓石
 - ④ 3号墓石
 - ⑤ 4号墓石
 - ⑥ 5号墓石
 - ⑦ 6号墓石
 - ⑧ 7号墓石
- 図版 3
- ① 8号墓石
 - ② 9号墓石
 - ③ 10号墓石
 - ④ 10号墓石側面
- 図版 4
- ① 1号墓人骨出土状況
 - ② 2号墓完掘状況
 - ③ 2号墓人骨出土状況
 - ④ 3号墓完掘状況
 - ⑤ 3号墓人骨出土状況
 - ⑥ 4号墓完掘状況
 - ⑦ 4号墓人骨出土状況
 - ⑧ 5号墓完掘状況
- 図版 5
- ① 6号墓完掘状況
 - ② 6号墓人骨出土状況
 - ③ 7号墓完掘状況
 - ④ 7号墓人骨出土状況
 - ⑤ 8号墓完掘状況
 - ⑥ 8号墓人骨出土状況
 - ⑦ 9号墓完掘状況
 - ⑧ 9号墓人骨出土状況

- | | | | |
|------|--------------|------|--------------|
| 図版 6 | ① 10号墓完掘状況 | 図版10 | ① 28号墓人骨出土状況 |
| | ② 11号墓完掘状況 | | ② 29号墓完掘状況 |
| | ③ 11号墓人骨出土状況 | | ③ 29号墓人骨出土状況 |
| | ④ 12号墓完掘状況 | | ④ 30号墓完掘状況 |
| | ⑤ 13号墓完掘状況 | | ⑤ 31号墓完掘状況 |
| | ⑥ 13号墓人骨出土状況 | | ⑥ 32号墓完掘状況 |
| | ⑦ 14号墓完掘状況 | | ⑦ 32号墓人骨出土状況 |
| | ⑧ 14号墓人骨出土状況 | | ⑧ 33号墓完掘状況 |
| 図版 7 | ① 15号墓完掘状況 | 図版11 | ① 33号墓人骨出土状況 |
| | ② 15号墓人骨出土状況 | | ② 34号墓完掘状況 |
| | ③ 16号墓完掘状況 | | ③ 34号墓人骨出土状況 |
| | ④ 16号墓人骨出土状況 | | ④ 35号墓完掘状況 |
| | ⑤ 17号墓完掘状況 | | ⑤ 36号墓完掘状況 |
| | ⑥ 17号墓人骨出土状況 | | ⑥ 36号墓人骨出土状況 |
| | ⑦ 18号墓完掘状況 | | ⑦ 37号墓完掘状況 |
| | ⑧ 18号墓人骨出土状況 | | ⑧ 37号墓人骨出土状況 |
| 図版 8 | ① 19号墓完掘状況 | 図版12 | ① 38号墓完掘状況 |
| | ② 19号墓人骨出土状況 | | ② 38・39号墓 |
| | ③ 20号墓完掘状況 | | ③ 39号墓完掘状況 |
| | ④ 20号墓人骨出土状況 | | ④ 39号墓人骨出土状況 |
| | ⑤ 21号墓完掘状況 | | ⑤ 40号墓完掘状況 |
| | ⑥ 21号墓人骨出土状況 | | ⑥ 40号墓人骨出土状況 |
| | ⑦ 22号墓完掘状況 | | ⑦ 41号墓完掘状況 |
| | ⑧ 23号墓完掘状況 | | ⑧ 41号墓人骨出土状況 |
| 図版 9 | ① 23号墓人骨出土状況 | 図版13 | ① 42から46号墓 |
| | ② 24号墓完掘状況 | | ② 47号墓完掘状況 |
| | ③ 24号墓人骨出土状況 | | ③ 48号墓完掘状況 |
| | ④ 25号墓完掘状況 | | ④ 48号墓人骨出土状況 |
| | ⑤ 25号墓人骨出土状況 | | ⑤ 49号墓完掘状況 |
| | ⑥ 26号墓完掘状況 | | ⑥ 50号墓完掘状況 |
| | ⑦ 27号墓完掘状況 | | ⑦ 50号墓人骨出土状況 |
| | ⑧ 28号墓完掘状況 | | ⑧ 51号墓完掘状況 |
| | | 図版14 | ① 51号墓人骨出土状況 |
| | | | ② 52号墓完掘状況 |
| | | | ③ 52号墓人骨出土状況 |
| | | | ④ 53号墓完掘状況 |
| | | | ⑤ 53号墓人骨出土状況 |
| | | | ⑥ 54号墓完掘状況 |
| | | | ⑦ 54号墓人骨出土状況 |

はじめに

(1) 祇園原遺跡の調査の概要

祇園原遺跡は日田市大字東有田のウッドコンビナート（日田高度総合木材加工団地）建設地内で確認された遺跡である。ウッドコンビナート建設事業は、日田市の基幹産業である林業が抱える諸問題への対策、および県が策定したグリーンボリス構想に基づき木材供給基地として計画されたもので、1期工事の開発面積約68haのなかで本遺跡を含め7つの遺跡が確認され、「有田塚ヶ原遺跡群」とした。祇園原遺跡は比高差30mほどの丘陵上に立地しており、調査面積は9,828㎡である。現地での作業は平成8年3月7日～平成8年10月3日の間行った。検出された遺構は、弥生～古墳時代の竪穴住居26基、掘立柱建物8棟、円形周溝遺構1基、小児用甕棺墓5基、土坑11基および近世墓55基である。詳細な調査原因や経過、調査組織等は『祇園原遺跡Ⅱ（弥生・古墳時代遺構編）』を参照いただきたい。

近世墓遺構については『祇園原遺跡Ⅱ（近世墓編1）』に実測図および計測値を掲載しているので参照頂きたい。今回報告を行う内容は、調査前に現地に残されていた近世墓石についての調査記録と出土人骨についての分析考察である。

なお、遺跡の立地と環境については『祇園原遺跡Ⅱ（弥生・古墳時代遺構編）』に詳細を述べているので、今回は割愛した。

(2) 調査組織

今年度の報告書作成にかかる調査組織は下記のとおりである。

平成22年度（報告書作成）

調査主体	日田市教育委員会
調査責任者	合原多賀雄（日田市教育委員会教育長）
調査事務	財津隆之（日田市教育庁文化財保護課課長） 土居和幸（同課埋蔵文化財係長）、中嶋美穂（同副主幹）、塚原美保（同主査）
報告書担当	渡邊隆行（同主任）
調査員	今田秀樹（同主査）、行時桂子（同主査）、若杉竜太（同主査） 矢羽田幸宏（同主事）
九州大学	田中良之教授（九州大学大学院比較社会文化研究院基層構造講座） 舟橋京子研究員（九州大学総合研究博物館） 高椋浩史、谷澤亜里、早川和賀子、米元史織、岩橋由季、李ハヤン （九州大学大学院比較社会文化学府基層構造講座）

IV 近世墓の調査

(1) 墓石の記録と概要 (写真図版1)

祇園原遺跡近世墓は、丘陵頂部の平坦地のなかでも弥生から古墳時代の住居群検出面より2~4mほど高い位置にある。調査前の現況では林のなかに墓石が幾つか残り、なかには倒れた状態のものも見られた。そのほかにも、字が刻まれていない墓標として利用されたと想定される自然石が無数に転がっていた。このような状況から、本来はかなりの数の墓標が整然と並ぶ墓地だったのではないかと考えられる。墓地の継続期間は、墓石の紀年が最も古いもので正徳4年(1714)、新しいもので文化8年(1811)頃であることから、少なくとも100年程度は継続した墓地であった可能性が推測される。地元の平島集落のかたの話では寺の火事により過去帳が焼失したため詳細不明な状態である。

ここでは、これらの墓石のうち銘の刻まれていた10基の墓石について、現地にて実測、拓本を行った記録を報告する。なお、墓石と近世墓の対応については、図面等の紛失により位置関係を把握できなくなっている。そのため、ここでは墓石の詳細についてのみ報告するものとする。なお、墓石の形態については、田中彰介 1996『女狐近世墓地』九州横断自動車道路関係埋蔵文化財発掘調査報告書⑤ 大分県教育委員会を参考にした。

1号墓石 (第2図、図版2)

台石の上にたたった状態で確認され、原位置をほぼ保っているものと想定される墓石である。墓石形態は位牌形で、頂部は丸みを帯びている。正面を浅く掘り窪めて戒名を「釈教順」と刻み、側面には「安永三年」(1774)「三月廿五日」と刻まれている。墓石規模は高さは68cm、幅29cm、厚さ20cmを測り、石材は凝灰岩である。

2号墓石 (第2図、図版2)

やや斜めに倒れ掛かった状態で確認され、台石等は見当たらず、原位置を保っているか不明な墓石である。ノミにより粗く柱状に加工した墓石の正面上部の一部を平滑に仕上げて名を刻んでいる。「小西半右衛門墓」と刻まれ、墓石規模は高さは68cm、幅21cm、厚さ19cmを測る。

3号墓石 (第2図、図版2)

台石の上にたたった状態で確認され、原位置をほぼ保っているものと想定される墓石である。墓石形態は位牌形で、頂部は丸みを帯び、全体に背丈が短い小型である。正面を浅く掘り窪めて戒名を掘り込む。一部判然としない箇所もあり、戒名は「釈○妙泰」、その右に「○化八〇未」左に「十二月十日」と書かれている。仮に年号が文化年間であれば文化8年(1811)に想定され得るものか。墓石規模は高さ44cm、幅27cm、厚さ20cmを測り、石材は凝灰岩である。

4号墓石 (第2図、図版2)

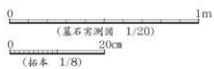
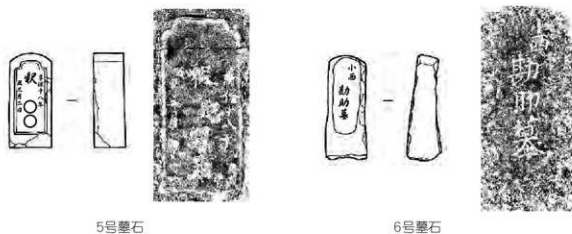
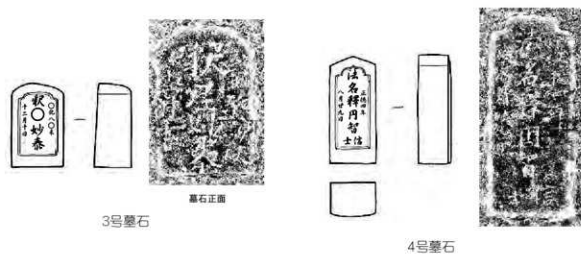
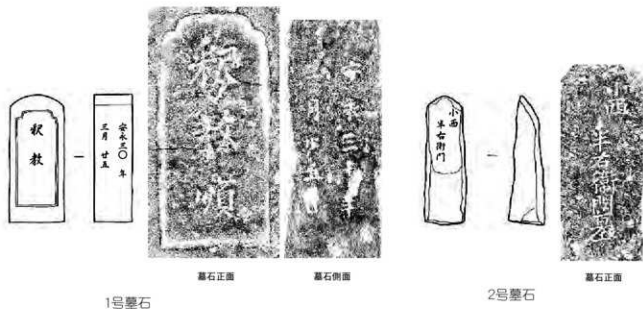
台石の上にたたった状態で確認され、原位置をほぼ保っているものと想定される墓石である。墓石形態は位牌形で、頂部は断面三角形形状を呈している。正面を浅く掘り窪めて戒名を「法名釋 円智 信士」と刻み、右側には「正徳四年」(1714)、左側には「八月廿九日」と刻まれている。墓石規模は高さは57cm、幅24cm、厚さ16cmを測り、石材は安山岩である。

5号墓石 (第2図、図版2)

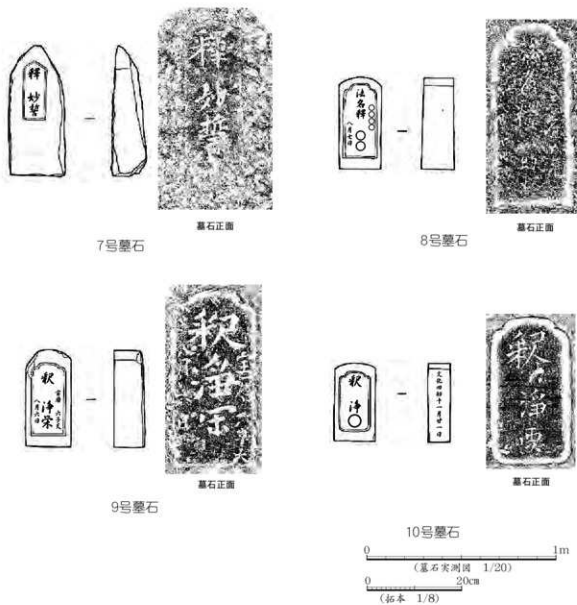
台石の上にたたった状態で確認され、原位置をほぼ保っているものと想定される墓石である。墓石形態は位牌形で、頂部は丸みを帯びている。正面を浅く掘り窪めて戒名を「釈○○」と刻み、右側には「享保十八年」(1733)「丑三月二日」と刻まれている。墓石規模は高さは50cm、幅22cm、厚さ17cmを測り、



第1圖 近世墓群遺構配置圖 (1/50)



第2図 墓石実測図① (1/8、1/20)



第3図 墓石実測図② (1/8、1/20)

り、石材は凝灰岩である。

6号墓石 (第2図、図版2)

やや斜めに倒れ掛かった状態で確認され、台石等は見当たらず、原位置を保っているか不明な墓石である。ノミにより粗く板状に加工した墓石の正面上部の一部を平滑に仕上げて名を刻んでいる。「小西勘助墓」と刻まれ、墓石規模は高さは56cm、幅22cm、厚さ22cmを測る。石材は凝灰岩製である。

7号墓石 (第3図、図版2)

やや斜めに倒れ掛かった状態で確認され、台石等は見当たらず、原位置を保っているか不明な墓石である。ノミにより粗く板状に加工した墓石の正面上部の一部を短冊状に平滑に仕上げて名を刻んでいる。「釋 妙覺」と刻まれ、墓石規模は高さは68cm、幅29cm、厚さ18cmを測る。石材は凝灰岩製である。

8号墓石（第3図、図版2）

台石の上にたった状態で確認され、原位置をほぼ保っているものと想定される墓石である。墓石形態は位牌形で、頂部は丸みを帯びている。正面を浅く掘り窪めて戒名を「法名釋 ○○」と刻み、右側には「○○○○」、左側には「八月七日」と刻まれている。墓石規模は高さは48cm、幅22cm、厚さ18cmを測り、石材は凝灰岩である。

9号墓石（第3図、図版2）

台石が見あらず、倒れた上体で確認された墓石で、原位置を保っていないものと考えられる。墓石形態は位牌形で、頂部は丸みを帯び、一部欠損している。正面を浅く掘り窪めて戒名を「釋 淨栄」と刻み、右側には「宝暦六子天」（1756）、左側には「八月六日」と刻まれている。墓石規模は高さは51cm、幅24cm、厚さ15cmを測り、石材は凝灰岩である。

10号墓石（第3図、図版2）

台石の上にたった状態で確認され、原位置をほぼ保っているものと想定される墓石である。墓石形態は位牌形で、頂部は丸みを帯びている。正面を浅く掘り窪めて戒名を「釋 淨○」と刻み、墓石左側面には「文化四卯十一月廿一日」（1807）と刻まれている。墓石規模は高さは41cm、幅22cm、厚さ12cmを測り、石材は凝灰岩である。

(2) 大分県日田市所在の祇園原遺跡から出土した近世人骨について

高橋浩史¹⁾・舟橋京子²⁾・谷澤亜里¹⁾・早川和賀子¹⁾・米元史織¹⁾・岩橋由季¹⁾
李ハヤン¹⁾・田中良之³⁾

1)九州大学大学院比較社会文化学府基層構造講座

2)九州大学総合研究博物館

3)九州大学大学院比較社会文化学研究院基層構造講座

1. はじめに

大分県日田市祇園原遺跡の調査において近世に該当する人骨が出土し、調査を担当した日田市教育委員会より九州大学大学院比較社会文化学研究院基層構造講座に人骨調査の依頼があった。そのため、金辛賢（現 東亜大学校）・石井博司・大森円・上角智希（現 福岡市教育委員会）・小沢住憲（現 福岡県教育委員会）・辻田淳一郎（現 九州大学人文科学研究院）・舟橋京子（現 九州大学総合研究博物館）が現地へ赴き、人骨の調査および取り上げを行った。人骨は取り上げ後、九州大学へと搬送され、本講座において整理・分析を行った。以下にその結果を報告する。なお、人骨資料は現在、九州大学大学院比較社会文化学研究院基層構造講座の古人骨・考古資料収蔵室に保管されている。

2. 人骨の出土状態

【1号人骨】

方形の墓域内中央から人骨がほぼまとまって出土している。頭蓋骨は南東側の床面から25cmの位置から顔面を南西にした状態で出土している。頭蓋骨の下部から肋骨・椎骨が出土している。頭蓋骨の北西・南東側に接してそれぞれ右・左上腕骨が近位を上にした状態で出土している。右肘関節は右寛骨直上に位置しほぼ関節状態で強屈しており、右前腕部が長軸を南北にした状態で出土している。頭蓋骨の西側からは左下肢骨が股関節・膝関節を強屈した状態で出土している。以上の出土状況から本個体は正面北西向きの座葬であると推定される。

【2号人骨】

方形の墓域内中央から人骨がほぼまとまって出土している。東側から上肢骨・軀幹骨・頭蓋骨が出土し西側から下肢骨が出土している。腰椎は東西方向に関節した状態で出土しており、その北側と南側からそれぞれ右と左の肋骨・鎖骨・上肢骨が出土している。頭蓋骨は顔面を下にして腰椎上から出土している。顎関節・右肘関節・左前腕部・右脛距関節および腰椎・仙腸骨は関節状態である。右膝関節は関節状態にはないもののほぼ解剖学的正位置を保ち強屈した状態である。頭蓋の上には下肢骨があり、下顎が頭蓋骨と関節していることから、下顎が外れる前に頭蓋が腹部付近に落下し、その後下肢骨が頭蓋の上に倒れ込んだと推定される。以上の出土状況から本個体は正面西向きの座葬と推定される。

【3号人骨】

長方形の墓域内北から人骨がまとまって出土している。頭蓋骨は顔面が北を向き、顎関節は関節状態である。頭蓋骨西側から右下肢骨が出土し、頭蓋骨直下からは左下肢骨が長軸を南北にそろえた状態で出土している。頭蓋骨北側直下からは右上肢骨が出土している。以上の出土状況から、本来座葬であつ

たものが、軟部組織の腐朽後に頭蓋が四肢骨上に落下したと考えられる。

【4号人骨】

方形の墓壇内中央から人骨がほぼまとまって出土している。頭蓋は墓壇底面近くから顔面を下にした状態で出土している。頭蓋骨東側からは左右上腕骨がそれぞれ長軸を南北にした状態で出土している。頭蓋骨の北側・北東側からは左右下股骨が大腿骨の近位を下にし、膝関節を強屈した状態で出土している。股関節は左右共に関節状態で強屈した状態である。右下股骨下部からは右前腕骨が出土している。以上の出土状況から、本個体は本来正面北向きの座葬であったものが軟部組織の腐朽後に頭蓋が左股関節上に落下したと推定される。

【6号人骨】

方形の墓壇内東側から人骨が出土している。南東側から後頭骨・肋骨・椎体・左側頭骨・上顎骨の順に出土しているが、詳細な埋葬姿勢は不明である

【7号人骨】

長方形の墓壇内から人骨が出土している。墓壇内北側から頭蓋が南側から四肢骨が出土している。頭蓋は顔面を西に向けた状態である。頭蓋南側からは長管骨が出土している。最も西側からは右下股骨が長軸を南北に揃えた状態で出土している。その東側からは左下股骨が大腿骨の近位を南にし膝関節を強屈した状態で出土している。左下腿骨直上からは右上肢骨が出土しており、右上腕骨滑車と右橈尺骨の近位端付近が関節状態で出土している。以上の出土状況より、本人骨は頭位北・顔面西向きの仰臥屈葬と推定される。

【8号人骨】

長方形の墓壇内から人骨が出土している。墓壇内北側から右側頭骨が外面を下にして出土していることから顔面を西に向けていたと推定される。頭蓋の南側から下股骨が長軸を北西-南東にほぼ揃えた状態で出土している。右大腿骨の上に左大腿骨と左脛骨が位置し、左の膝関節は関節状態にあり強屈した状態である。左大腿骨近位側直下からは寛骨片が出土している。以上の出土状況から本個体は頭位北・顔面西向きの屈葬と推定される。

【9号人骨】

長方形の墓壇内南側からまとまった状態で人骨が出土している。人骨の出土範囲を囲むようにして45cm四方の範囲から釘が出土している。人骨に関しては、北東側から頭蓋が顔面を西にした状態で出土している。頭蓋の西側から左大腿骨が近位を南にし長軸を南北にした状態で出土している。また、頭蓋の北西側から右大腿骨が近位を南西に右脛骨が近位を北東にし、長軸を南西-北東にそろえた状態で出土している。南西隅からは椎骨および肋骨が正面を北東に向けて関節した状態で出土している。右肋骨南側からは右上肢骨が出土しており前腕の北側から右腕骨が正面を北東にした状態で出土している。以上の出土状況から、本個体は木棺内に埋葬されており、正面を北東にした座葬であり軟部組織の腐朽に伴い頭蓋が膝部に落下したと推定される。

【11号人骨】

長方形の墓壇内の約45cm×45cmの範囲から人骨が出土している。東側から頭蓋が顔面を北西にしやや下を向いた状態で出土している。頭蓋の南北からはそれぞれ左右上腕骨が近位を東にした状態で出土している。頭蓋下部からは椎骨と肋骨が正面を北西にし関節した状態で出土している。頭蓋骨の西側から

は左右大腿骨が近位を西に左右脛骨が近位を東に向け、長軸を東西にそろえた状態で出土している。左股関節・膝関節・足首関節は関節し強屈した状態である。下肢骨下部からは椎骨と仙骨が関節し正面を上にした状態で出土している。下肢骨の上からは右前腕が長軸を北東-南西にした状態で出土している。以上の出土状況から本個体は正面を北西にした座葬であると推定される。

【13号人骨】

長方形の墓壇内から人骨が出土している。中央付近から頭蓋骨が顔面を西にした状態で出土している。頭蓋南側からは左上腕骨がほぼ重なった状態で近位を北東にし長軸を北東-南西に揃えた状態で出土している。指骨は頭蓋顔面部の西側から近接して出土している。上腕骨南側からは肩甲骨・鎖骨・椎骨が解剖学的正位置を保った状態で出土しており、その南側からは左右下肢骨が長軸を北西-南東にほぼ揃え膝関節を強屈した状態で出土している。以上の出土状況から本個体は頭位北・顔面西向きの側臥屈葬であり、掌が顔の前に位置していたと推定される。

【14号人骨】

長方形の墓壇内の約50cm四方の範囲から人骨がまとまって出土している。北西側からは頭蓋骨が顔面を西に向けた状態で出土している。その直下および東側から下肢骨が長軸を南北にほぼ揃え、大腿骨の近位を南にし脛骨の遠位を北にし、膝関節を強屈した状態で出土している。下肢骨直下からは左右足骨と左前腕骨が出土しており、脛距関節は関節状態である。左大腿骨の東西からはそれぞれ左上腕骨と左前腕が、上腕骨の近位を北にし長軸を南北に揃え肘関節を強屈した状態で出土している。頭蓋下部および頭蓋東側からは頭椎・胸骨が出土しており、南東側からは腰椎が正面を下に上面を北にし関節した状態で出土している。以上の出土状況から本個体は正面を北西にした座葬であると推定される。

【15号人骨】

長方形の墓壇内から人骨がまとまって出土している。北東側からは椎骨と肋骨が関節した状態で出土している。その南西側からは頭蓋骨が出土しており、頭蓋骨の南側から左大腿骨・脛骨が長軸を東西にした状態で出土しており、頭蓋骨下部からは右脛骨・大腿骨が長軸を南北にした状態で出土している。以上の出土状況から、本個体は正面を西にした座葬であり軟部組織の腐朽に伴い頭蓋が下肢の上に落下したと推定される。

【16号人骨】

方形の墓壇内から人骨が出土している。北側からは頭蓋が出土しており、10cmほど離れた南側から下肢骨が長軸を東西にそろえた状態で出土している。以上の出土状況から本個体は頭位を北にした屈葬の可能性が考えられる。

【17号人骨】

方形の墓壇内から人骨が出土している。頭蓋は北側壁に近接し顔面を西南に頭頂部を北西にした状態で出土している。頭蓋東側からは椎骨が並んだ状態で出土している。頭蓋南側からは下肢骨が長軸をほぼ南北に揃え大腿骨の近位を南にし膝関節を強屈した状態で出土している。大腿骨近位側からは骨盤片が出土している。以上の出土状況から本個体は頭位北・顔面西向きの屈葬の可能性が考えられる。

【18号人骨】

長方形の墓壇内から人骨が出土している。頭蓋は、北側壁に近接し顔面を北西に向けた状態で出土している。頭蓋骨南側からは椎骨片が出土している。南側からは左右下肢骨が長軸をほぼ南北に揃え膝

関節を強屈した状態で出土しており、右脛骨は近位を南側にした状態である。下肢骨直下からは右上肢が長軸を南北に揃えた状態で出土している。以上の出土状況から本個体は頭位北・顔面西向きの屈葬と推定される。

【19号人骨】

長方形の墓壇内から人骨が出土している。墓壇内北側から頭蓋が顔面を西に向けた状態で出土している。頭蓋の南側からは大腿骨が長軸を南北にした状態で出土している。以上の出土状況から本個体は座葬もしくは屈葬の可能性が考えられる。

【20号人骨】

長方形の墓壇内から人骨が出土している。墓壇内北側から頭蓋が顔面を東に頭頂部を北に向けた状態で出土している。手根骨が頭蓋付近から出土している。頭蓋南西側から軀幹骨・上肢骨が出土しておりその南側からは下肢骨が出土している。下肢骨は左右共に大腿骨の近位を南側にし膝関節を強屈した状態で出土している。大腿骨近位側からは骨盤が出土しており、左寛骨・仙骨は正面を上向き、右寛骨は正面を下にした状態で出土している。以上の出土状況から本個体は頭位北・顔面東向きの左側臥屈葬であったと推定され、顔の前に掌をもってきていたと考えられる。

【21号人骨】

方形の墓壇内から人骨が出土している。墓壇内北側から頭蓋が出土しており、南西側から下肢骨が出土している。下肢骨は長軸を南北に揃え、左大腿骨が右大腿骨の上にやや重なった状態で出土している。左右ともに近位を南にし膝関節を強屈した状態で出土している。以上の出土状況から本人骨は頭位北・顔面西向きの屈葬もしくは座葬の可能性が考えられる。

【22号人骨】

方形の墓壇内から頭蓋骨が顔面を北に頭頂部を東に向けた状態で出土しているが、他の部位の遺存状態が悪いため・頭位・埋葬姿勢は不明である。

【23号人骨】

長方形の墓壇内から人骨が出土している。北側から頭蓋が顔面を西に向けた状態で出土している。頭蓋南側からは軀幹骨が出土しており、椎骨は頭椎・胸椎間で乱れているものの胸椎以下はほぼ関節状態を保ち、前面が西を向いており左肋骨は椎骨上から出土している。軀幹骨の西側からは左右上腕骨が出土している。その西側からは下肢骨が長軸をほぼ南北に揃え大腿骨の近位を南にし膝関節を強屈した状態で出土している。大腿骨近位側から仙骨と右寛骨が前面を上にした状態で出土している。左右前腕は左大腿骨の下からそろって出土し、関節状態をほぼ保っていた左上肢は肘関節を屈曲し回内状態である。以上の出土状況から本個体は頭位北・顔面西向きの屈葬であったと推定される。

【24号人骨】

方形の墓壇内の50cm四方の範囲から人骨がまとまって出土している。東側からは頭蓋骨が顔面を下にし頭頂部を北にした状態で出土している。頭蓋直下からは下顎骨・右上肢・右下肢骨が出土している。墓壇内西側からは左下肢骨が長軸を南北に揃えた状態で出土している。直下からは左前腕部が出土している。以上の出土状況から本個体は正面を北にした座葬と推定される。

【25号人骨】

長方形の墓壇内から人骨がほぼまとまって出土している。墓壇内北側から頭蓋骨片が顔面を西に向け

た状態で出土している。頭蓋骨南東側からは上腕・軀幹骨が出土している。右上腕骨と右肩甲骨の上からは右鎖骨・頭椎・肋骨が出土しており、一部は下顎骨の上にまで及んでいる。頭蓋の南西側からは下腿骨が長軸を南北に揃えた状態で出土しており、右脛骨は近位を北に前面を西に向けており、膝関節を屈曲していたと考えられる。以上の出土状況から本個体は頭位北・顔面西向きの屈葬もしくは座葬の可能性が考えられる。

【26号人骨】

長方形の墓壇内から人骨が出土している。北側からは頭蓋骨が出土している。頭蓋の南側からは左右大腿骨が近位を南にし長軸を南北に揃えた状態で出土している。大腿骨遠位側直下からは右上腕骨が出土しており、近位側直下からは寛骨片が出土している。以上の出土状況から本個体は頭位北向きの屈葬と推定される。

【28号人骨】

長方形の墓壇から人骨が出土している。墓壇内北側から頭蓋骨が顔面を西に頭頂部を上に向けた状態で出土している。墓壇内南側からは下腿骨が長軸を北西-南東に揃えた状態で出土している。以上の出土状況から本個体は頭位北・顔面西向きの屈葬と推定される。

【29号人骨】

方形の墓壇から人骨が出土している。墓壇内北側から頭蓋骨が顔面を南西に頭頂部を北に向けた状態で出土している。東側からは左下肢が股関節・脛距関節が関節し、股関節を強屈した状態で出土している。西側からは右下肢骨が長軸を南北に揃えた状態で出土している。上肢骨は遺存していないが、指骨が頭蓋の中から出土しており、手を頭部付近に置いていた可能性がある。以上の出土状況から本個体は頭位北・顔面西向きの屈葬と推定される。

【32号人骨】

長方形の墓壇から人骨が出土している。墓壇内北側から頭蓋骨が出土している。頭蓋骨の南側からは下腿骨が長軸を南北に揃え大腿骨の近位を南にし膝関節を強屈した状態で出土している。大腿骨近位側直下からは、右寛骨・仙骨が正面を上にし左寛骨が外側を上にした状態で出土している。左股関節は関節し強屈した状態である。頭蓋と骨盤の間からは肋骨と上肢骨が出土している。肋骨の東西からそれぞれ左・右上肢が出土しており、ともに長軸をほぼ南北に揃え上腕骨の遠位を北にした状態であり、肘関節を強屈している。以上の出土状況から本個体は頭位北・顔面西向きの右側臥屈葬と推定される。

【33号人骨】

方形の墓壇内北側から頭蓋骨の破片が出土している。本人骨は保存状態がよくないため埋葬姿勢は不明である。

【34号人骨】

長方形の墓壇内から人骨が出土している。墓壇内北側から頭蓋が顔面を南西にし頭頂部を北西に向けた状態で出土している。頭蓋南側からは下腿骨と考えられる長管骨がやや重なり長軸を南北にした状態で出土している。以上の出土状況より、本人骨は頭位北向きの屈葬もしくは座葬の可能性が考えられる。

【36号人骨】

長方形の墓壇中央付近で人骨がまとまって出土している。頭蓋骨は顔面を北に向け頭頂部を上を向

いている。下顎はオトガイを上方に前面を北に向けている。頭蓋の東西からそれぞれ右・左の上腕骨が近位を南にした状態で出土しており、頭蓋下から前腕部が出土している。左右共に肘関節は関節状態ではないが、上腕骨の遠位と橈骨の近位は近い位置にあり強屈した状態で、両側肘は膝より内側に位置している。右前腕の直下からは指骨が出土している。下肢は頭蓋の東西からそれぞれ右・左の下肢骨が、大腿骨の近位を下にし膝関節を屈曲した状態で出土している。以上の出土状況より、本人骨は正面を北に向けた座葬と推定される。

【37号人骨】

長方形の墓壇内から人骨がまとまって出土している。墓壇内東側から頭蓋が顔面を北東にした状態で出土している。その西側から大腿骨が近位を西にし脛骨が近位を東にし長軸を東西にそろえた状態で出土している。下肢骨の南側からは椎骨・肋骨が前面を北にし関節した状態で出土している。大腿骨近位側下部からは左右寛骨が出土しており右寛骨は前面が上左寛骨は前面を北東にした状態で出土している。左股関節は関節した状態である。左下肢下部からは右上肢が出土し左大腿骨直上から左前腕が出土している。以上の出土状況から本個体は正面を北西にした座葬であると推定される。

【39号人骨】

長方形の墓壇内から人骨が出土している。頭蓋骨は顔面を南にし頭頂部を東に向けた状態で出土しており、頸関節は関節状態にある。頭蓋南西側から躯幹骨・鎖骨が出土しており、頭椎は第1～第7頸椎まで関節状態に近く、鎖骨および直下の第1肋骨は解剖学的な正位置を保っていない。躯幹骨の東西からそれぞれ左・右の上肢骨が出土している。左上肢骨は前面を東に向け肘関節を伸展しており、肩関節・肘関節共に関節状態にある。右上肢骨は上腕骨の近位を北にし肘関節を屈曲した状態で前腕部は右膝上に位置する。下肢骨については、左右共に膝関節が関節状態にあり、大腿骨の近位を南にし膝関節を屈曲した状態で出土している。大腿骨近位側直下からは、仙骨・左右寛骨が前面を上にした状態で出土している。以上の出土状況より、本個体は頭位北向きの仰臥屈葬と推定される。頭部については埋葬当初から出土時と同じく東側に倒した状態であった可能性と、本来は首を起こして顔面を足の方に向けて埋葬されたものが軟部組織の腐朽もしくは土砂の流入により頭椎ごと東に倒れた可能性が考えられる。

【40号人骨】

方形の墓壇内から人骨がほぼまとまって出土している。北東側からは頭蓋骨が顔面を西にし頸関節が関節した状態で出土している。頭蓋骨東側および直下からは右上肢骨が上腕骨の近位を北東にし肘関節をやや軽屈した状態で出土している。頭蓋南側からは椎骨が一部関節状態を保って出土しており、椎骨西側から肋骨・左上肢が出土している。頭蓋西側からは左右寛骨と下肢骨が出土している。下肢は大腿骨の近位を下にし膝関節を強屈した状態で出土している。以上の出土状況から本個体は正面西向きの座葬で軟部組織の腐朽に伴い頭蓋が腹部付近に落下したと推定される。

【41号人骨】

墓壇内から人骨がほぼまとまって出土している。頭蓋骨は顔面を東に頭頂部を北にした状態で出土している。頭蓋の東側からは右大腿骨・右上肢骨が長軸を南北に揃え、大腿骨・前腕の近位が北、上腕の近位が南の状態、上から前腕・大腿骨・上腕骨の順で出土している。頭蓋西側からは左下肢が出土しており、大腿骨の近位を北にし膝関節を強屈した状態で出土している。左大腿骨西側からは左上肢骨が長軸を大腿骨と揃え近位を南にした状態で出土している。左前腕部は左脛骨遠位付近直上から脛骨と直

交した状態で出土している。左脛骨直下からは椎骨・骨盤がほぼ解剖学的な位置を保った状態で前面を上にして上面を南にした状態で出土している。以上の出土状況から、本個体は正面北向きの座葬で、上肢は下肢を包むような姿勢であったと推定できる。

【47号人骨】

長方形の墓壇内から人骨が出土している。北側からは頭蓋骨が出土しており、20cm離れた南側からは下肢骨が長軸を東西にした状態で出土している。以上の出土状況から本個体は頭位北向きの屈葬の可能性が考えられる。

【48号人骨】

方形の墓壇内から頭蓋のみが顔面を東に向け頭頂部を北にした状態で出土している。人骨の保存状態がよくないため、本個体の埋葬姿勢は不明である。

【50号人骨】

方形の墓壇内から人骨が出土している。北側からは頭蓋骨が顔面を西に頭頂部を北にした状態で出土している。頭蓋の南側からは椎骨片や右上肢骨が出土している。右上肢骨は上腕骨の近位を北にし肘関節が関節し強屈した状態で出土している。上肢の西側からは左右下肢骨が長軸を南北に揃え大腿骨の遠位を南側にし膝関節を強屈した状態で出土している。大腿骨近位側からは骨盤片も出土している。以上の出土状況から本個体は頭位北・顔面西向きの屈葬と推定される。

【51号人骨】

方形の墓壇内から人骨がほぼまとまって出土している。墓壇内北側の底部付近から頭蓋・軀幹・上肢骨が出土している。頭蓋の南西側からは、左右寛骨が前面を上にして上面を北東側にした状態で出土しており、その西側からは下肢骨が出土している。下肢骨は大腿骨の近位を下にし膝関節を強屈した状態で出土している。下肢の南東・北西からはそれぞれ左・右の上肢骨が出土している。以上の出土状況から本個体は正面西向きの座葬であり、軟部組織の腐朽に伴い頭蓋が落下したと推定される。

【53号人骨】

方形の墓壇内から人骨が出土している。墓壇内北側から頭蓋骨が顔面を南に頭頂部を西に向けた状態で出土している。南側からは長管骨が長軸を南北にほぼそろえた状態で出土している。以上の出土状況から本個体は座葬もしくは屈葬の可能性が考えられる。

【54号人骨】

長方形の墓壇内から人骨が出土している。北側から頭蓋骨が顔面を西に頭頂部を北に向けた状態で出土している。頭蓋南側からは上肢骨が長軸を東西に揃えた状態で出土している。さらにその南側からは下肢骨が長軸を南北に揃え大腿骨の近位を南にし膝関節を強屈した状態で出土している。下肢骨直下からは右上肢骨が出土している。以上の出土状況から本個体は座葬もしくは屈葬の可能性が考えられる。

3. 人骨所見

【1号人骨】

〔保存状態〕本人骨の保存状態は良好である。頭蓋は顔面部と左前頭骨・側頭骨の一部・上顎骨を除いた部分が遺存している。外後頭隆起・眼高上隆起は発達しており、主要三縫合は内・外板ともにほぼ閉じている。残存歯式は以下の通りである。

/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/
×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×

(○歯槽開放 ×歯槽閉鎖 /欠損 △歯根のみ・遊離歯 ()未萌出 c齶歯 (以下同様))

軀幹骨は胸骨・肋骨の一部・頸椎・胸椎・腰椎・仙骨の一部が遺存している。上肢骨は、左右鎖骨・左右肩甲骨の一部・左右上腕骨・左右橈骨・左右尺骨が遺存している。また、左右の手根骨・左右中手骨・左右指骨の一部も遺存している。下肢骨は左右寛骨・左右大腿骨・左右脛骨・左右腓骨の一部が遺存している。また、左右の足根骨・左右中足骨・左右指骨も遺存している。寛骨大坐骨切痕角・恥骨下角は狭く、大腿骨粗線・脛骨ヒラメ筋線はやや発達している。

〔性別と年齢〕性別は、外後頭隆起・眼高上隆起が発達し、大腿骨粗線・脛骨ヒラメ筋線もやや発達しており、大坐骨切痕角・恥骨下角も狭いことから、男性と判定される。年齢は、下顎の歯槽がすべて閉鎖しており、主要三縫合もすべて閉鎖しており第5腰椎に骨棘がみられることから老年であると推定される。

〔形質〕頭蓋最大長は170でBa-Br高が127.5であり、兩計測値ともに比較群中最も低い値を示している。頭高長示数(17/1)は75.0であり、中頭に近い高頭型に属し、比較群中では低い値を示す。

〔特記事項〕右肩甲骨関節窩・右上腕骨の遠位関節と右尺骨の近位関節および腰椎に加齢性と推定される骨棘が認められる。

【2号人骨】

〔保存状態〕本人骨の保存状態は良好である。頭蓋は完存している。前頭結節は発達しており、眼高上隆起・外後頭隆起・乳様突起は発達しておらず、主要三縫合は外板が開いており内板は閉じている。歯牙も遺存しており残存歯牙の歯式は以下の通りである。

	c																	
M ²	M ²	M ¹	P ²	P ¹	C	I ²	I ¹	I ¹	I ²	C	P ¹	P ²	M ¹	M ²	○			
M ₃	M ₂	M ₁	P ₂	P ₁	C		I ₁	○	○	C	P ₁	△	M ₁	M ₂	(M ₃)			

歯牙咬耗度は橋原（1957）の1°c～2°aである。下顎右側切歯は、先天的に欠如している。軀幹骨は、頸椎・胸椎・腰椎が完存し、肋骨もほぼすべて遺存している。上肢骨は左右鎖骨・左右肩甲骨の一部・左右上腕骨・左右橈骨・左右尺骨および右手の手根骨・中手骨・指骨が遺存している。上腕骨三角筋粗面はやや発達している。下肢骨は、左右寛骨の一部・左右大腿骨・右膝蓋骨および左右脛骨・左右腓骨・左右足根骨の一部が遺存している。大坐骨切痕は広く大腿骨粗線・脛骨ヒラメ筋線はあまり発達していない。脛骨耳状面に表面の多孔質化および骨棘（Lovejoy, 1985）がみられる。

(性別と年齢) 性別は、大坐骨切痕の角度が広く、眼高上隆起・乳様突起・外後頭隆起が発達しておらず、上腕骨三角筋粗面はやや発達しているものの下肢骨はあまり発達していないことから、女性と判定される。年齢は、頭蓋主縫合・歯牙咬耗度・腸骨耳状面から熟年と推定される。

(形質) 脳頭蓋は、最大長が166.0で、最大幅が126.2と非常に低い値であるが、Ba-Br高が132.0とやや高いため、頭長幅示数(8/1)が76.0で長頭に近い中頭型、頭長高示数(17/1)が79.5で高頭型に属する。頭長幅示数は比較的低い方であるが、頭長高示数は比較群のうち稲荷谷近世集団と近似し最も大きい値を示す。顔面頭蓋は、中顔幅が98.6で比較的広く、顔高が115.0と比較的高く、上顔高が65.4と比較群中に最も低い。ウィルヒョウ顔示数(47/46)は116.6と低顔型、ウィルヒョウ上顔示数(48/46)が66.3と過低顔に近い低顔型に属する。眼高は、幅が36.3高さが34.3、示数(52/51)が94.5であり、高眼高型に属し比較群中最も大きい値を示している。鼻は、幅25.4高さ48.9で、ともに比較近世集団の平均値に近い値である。示数(54/55)は52.0と、広鼻型である。歯槽側面角は79°中顎に近い突顎型に属し比較群中大きな値を示す。

【3号人骨】

(保存状態) 本人骨の保存状態はあまり良くない。頭蓋は右側頭骨・額骨・頭頂骨・後頭骨の一部および頭蓋底の一部を除いた部分が遺存している。眼高上隆起・乳様突起・外後頭隆起は発達していない。主要三縫合は外板は閉じかけており内板はほぼ閉じている。歯牙も一遺存しており、残存歯牙の歯式は以下の通りである。

○	○	M ¹	○	○	○	I ²	I ¹	I ¹	I ²	○	×	○	M ¹	M ²	(M ³)
M ₂	M ₁	P ₂	P ₁	C	I ₂	I ₁	I ₁	I ₂	C	P ₁	P ₂	M ₁	M ₂		

歯牙の咬耗度は柘原(1957)の3°である。

上肢骨は、左鎖骨・右上腕骨体部・右橈骨および左右不明基節骨が3点遺存している。下肢骨は左右大腿骨体部・左右脛骨体部・左腓骨体部が遺存している。大腿骨粗線・脛骨ヒラメ筋線は発達していない。

(性別と年齢) 性別は、眼高上隆起・乳様突起・外後頭隆起が発達しておらず下肢も発達していないことから女性と判定される。年齢は、主要三縫合および歯牙咬耗度から熟年前後と推定される。

(形質) 頭蓋最大長は170.0でやや短く、最大幅は136.0でやや広い値である。その結果、頭長幅示数(8/1)は80.0と、中頭に近い短頭型であり、比較群中でも高い方に入る。顔面頭蓋は、中顔幅が91.0で非常に狭いものの、顔高は105.5・上顔高は58.7でありともに非常に低い。ウィルヒョウ顔示数(47/46)は115.9と過低顔に近い低顔型、ウィルヒョウ上顔示数(48/46)が64.5と低顔に近い過低顔型に属する。顔示数は吉母浜中世集団より高く北部九州弥生集団に近い値であり、上顔示数は比較群中最も低い値を示している。眼高は、幅が37.8高さが32.7で、示数(52/51)は86.3と高眼高型に属し、比較群中で高い値である。これは、眼高が非常に狭いためであり、稲荷谷近世集団に近い値である。鼻幅は25.8と比較群の平均に近い値である。歯槽側面角は77°と突顎型に属する。

【4号人骨】

【保存状態】本人骨の保存状態はあまり良くない。頭蓋は左右上顎骨・右側頭骨・右頭頂骨・後頭骨の一部および下顎骨の一部を除いた部分が遺存している。眼高上隆起・外後頭隆起・乳様突起は発達していない。冠状縫合・矢状縫合は外板が一部閉じており内板は閉じている。遺存歯式は以下の通りである。

／	／	／	／	／	／	／	／	／	／	／	／	／	／	／
／	／	／	／	／	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×

軀幹骨は、椎骨の一部と肋骨の一部が少量遺存する。上肢骨は、右上胸骨の一部・左上胸骨骨体部・右橈骨遠位部・右尺骨遠位部・左橈骨の一部・左尺骨の一部が遺存している。また、左右の手根骨・中手骨・指骨の一部が遺存している。下肢骨は、左右寛骨・左右大腿骨・左右脛骨・左右腓骨および左右の足根骨・中足骨の一部が遺存している。寛骨大坐骨切痕角は広く、大腿骨粗線・脛骨ヒラメ筋筋は発達していない。

【性別と年齢】眼高上隆起・外後頭隆起・乳様突起は発達しておらず、寛骨大坐骨切痕角も広く下肢骨も発達していないことから女性と判定される。年齢は、頭蓋縫合の閉鎖状況および下顎の歯槽が閉鎖していることから老年と推定される。

【特記事項】右尺骨遠位関節面に骨棘が認められる。

【6号人骨】

【保存状態】本人骨の保存状態はあまり良くない。頭蓋は右上顎体・左側頭骨の一部・後頭骨の底部付近・下顎骨の一部が遺存している。歯牙も遺存しており、存存歯牙の歯式は以下の通りである。

(M ¹)	m ²	m ¹	c	i ²	i ¹	i ¹	／	c	m ¹	m ²
(M ₁)	m ₂	m ₁	c	i ₂	i ₁	／	／	／	m ₁	m ₂

軀幹骨は、肋骨が少量遺存している。下肢骨は、右寛骨の一部が遺存している。その他、部位不明の長管骨の骨体部が遺存している。

【性別と年齢】性別は判定可能な年齢に達していないことから不明である。年齢は、上顎・下顎のM₁がともに歯冠形成中で歯根は未形成であることから、3歳前後の幼児であると推定される。

【7号人骨】

【保存状態】本人骨の保存状態はあまりよくない。頭蓋は左右頭頂骨・後頭骨のラムダ縫合付近および右側頭骨の乳様突起付近と下顎骨の一部が遺存している。外後頭隆起・乳様突起は発達していない。矢状縫合・ラムダ縫合は外板はやや開いており内板はほとんど閉じている。歯牙も一部認められ残存歯牙の歯式は以下の通りである。

／	／	／	／	／	／	／	／	／	／	／	／	／	／	M ³
×	×	×	×	×	×	×	×	×	／	／	／	／	／	／

歯牙の咬耗度は、橋原（1957）の1° aである。

軀幹骨は、肋骨破片・頸椎を含む椎骨が数点遺存するのみである。上肢骨は、左右不明鎖骨片・右上腕骨片・右桡骨片・右尺骨片および手骨の一部が遺存している。下肢骨は、寛骨片・左右大腿骨片・左右脛骨片・左右腓骨片および距骨片と足の指骨が一部遺存している。

【性別と年齢】性別は、乳様突起と外後頭隆起が発達していないことから女性であると判定される。年齢は、頭蓋縫合の閉鎖状況および下顎右側の歯槽がすべて閉鎖していることから老年であると推定される。

【8号人骨】

【保存状態】本個体の保存状態はあまりよくない。頭蓋は右オトガイ孔付近の下顎骨と頭蓋底の破片が少量遺存する。また、歯牙も一部遺存しており、残存歯牙の歯式は以下の通りである。

M ³	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	M ³		
M ₃	M ₂	M ₁	P ₂	/	/	/	/	/	C	/	/	M ₁	M ₂	/

歯牙の咬耗度は、橋原（1957）の1° b～2° aである。

下肢骨は、左寛骨の一部・左右大腿骨骨体の一部・左右脛骨片・右膝蓋骨片が遺存する。大腿骨粗線は発達していない。

【性別と年齢】性別は、判定可能な部位が遺存していないため不明である。年齢は、歯牙の咬耗度から熟年と推定される。

【9号人骨】

【保存状態】本人骨の保存状態は良好である。頭蓋は左右頭頂骨・前頭骨・左右頬骨を除いた部分が遺存している。乳様突起・外後頭隆起は発達していない。ラムダ縫合は外・内板ともに開いている。歯牙は遺存しておらず、歯槽はすべて閉鎖している。軀幹骨は頸椎・胸椎・腰椎と胸骨および肋骨の一部が遺存している。椎骨には全体的に骨棘が認められる。上肢骨は右鎖骨・左右肩甲骨および左上腕骨と左右桡骨・左右尺骨の近位側・手根骨の一部が遺存している。上腕骨三角筋粗面はやや発達している。下肢骨は右寛骨の腸骨翼付近と左恥骨付近および右大腿骨・左大腿骨遠位側・左右脛骨・腓骨遠位側と左右足根骨一部が遺存している。大腿骨粗線・脛骨ヒラメ筋線は発達していない。

【性別と年齢】性別は、上腕骨三角筋粗面がやや発達しているものの乳様突起・外後頭隆起および下肢骨が発達していないことから女性と判定される。年齢は、椎骨に骨棘がみられ、歯槽が全て閉鎖していることから老年と推定される。

【特記事項】椎骨および膝蓋骨の関節面に骨棘が認められる。腰椎には圧迫骨折の所見も認められる。

【11号人骨】

【保存状態】本人骨の保存状態は良い。頭蓋は左右頭頂骨・後頭骨を除いた部分が遺存している。眼窩上隆起・乳様突起は発達している。冠状縫合は外板が開いており内板は閉じている。歯牙は遺存しておらず、歯槽はすべて閉鎖している。

軀幹骨は頸椎・胸椎・腰椎・胸骨・仙骨の上側および肋骨が遺存している。上肢骨は左右鎖骨・左右肩甲骨・骨頭をのぞく左上腕骨・右桡骨遠位側・尺骨近位側・左尺骨・右桡骨体部片が遺存している。上腕骨三角筋粗面は発達している。下肢骨は、左寛骨の腸骨翼部と右恥骨の一部・骨頭を除く左右大腿

骨・左右脛骨・左腓骨および右腓骨体部片が遺存している。大坐骨切痕角は小さく、大腿骨粗線・脛骨ヒラメ筋線は発達している。

(性別と年齢) 性別は、眼高上隆起・乳様突起および四肢骨が発達しており大坐骨切痕角も狭いことから男性と判定される。年齢は頭蓋縫合の閉鎖状況および歯槽が全て閉鎖していることから老年と推定される。

(形質) 顔面頭蓋は、中顔幅が98.9で比較的狭い。眼窩は、幅が38.3高さが29.4であり、示数(52/51)は76.6と、低眼窩に近い中眼窩型である。鼻は、幅24.0・高さ51.5で、示数(54/55)は46.5であり、狭鼻型に属する。鼻示数と眼窩示数は、比較群中最も低い値である。

(特記事項) 腰椎に骨棘が認められる。

【13号人骨】

(保存状態) 本人骨の保存状態はあまりよくない。頭蓋は前頭骨の眼高上隆起付近と右上顎骨および頭頂骨の頭頂・側頭縫合付近・右側頭骨・下顎体の右側の一部が遺存している。歯牙も一部遺存しており、残存歯牙の歯式は以下の通りである。

\diagup × M ¹ P ² P ¹ C I ² I ¹	\cdot \cdot \cdot \cdot	\cdot \cdot	\cdot \cdot \cdot \cdot	\diagup \diagup \diagup \diagup M ¹ M ² M ³
M ₃ × ○ P ₂ P ₁ C I ₂ I ₁	\cdot \cdot \cdot \cdot	\cdot \cdot	\cdot \cdot \cdot \cdot	I ₁ \diagup \diagup \diagup P ₂ M ₁ \diagup \diagup

歯牙咬耗度は橋原(1957)の2° bである。

軀幹骨は椎骨と肋骨が若干遺存している。上肢骨は左右鎖骨・右肩甲骨関節窩・右上腕骨の骨頭と遠位側・左上腕骨と右尺骨片が遺存している。下肢骨は腸骨翼と恥骨下肢を除く左寛骨・左右大腿骨・左右脛骨・右腓骨と左右距骨・踵骨が遺存している。寛骨大坐骨切痕角は狭く、大腿骨粗線・脛骨ヒラメ筋線は発達している。

(性別と年齢) 性別は、乳様突起・四肢骨が発達しており、大坐骨切痕角も狭いことから男性と判定される。年齢は、歯牙咬耗度から熟年と推定される。

【14号人骨】

(保存状態) 保存状態は比較的良好である。頭蓋は右乳様突起・右頬骨・上顎骨の一部を除く部分が遺存している。眼高上隆起・外後頭隆起・乳様突起は発達している。頭蓋主要三縫合は外板が閉じかけており内板は閉じている。残存歯牙の歯式は以下の通りである。

\diagup \diagup ○ P ¹ ○ ○ ○	\cdot \cdot	\cdot \cdot	\cdot \cdot \cdot \cdot	I ¹ I ² C P ¹ ○ M ¹ ×
○ M ₂ × P ₂ × C I ₂ ○	\cdot \cdot	\cdot \cdot	\cdot \cdot \cdot \cdot	○ I ₂ C P ₁ × ○ ○ ○

歯牙の咬耗度は橋原(1957)の2° bである。

軀幹骨は、胸骨・左右肋骨・椎骨および仙骨の一部が遺存している。上肢骨は左右鎖骨・左右肩甲骨・左右上腕骨・左右尺骨・左右橈骨と左右指骨の一部が遺存している。上腕骨三角筋粗面は発達している。

下肢骨は左右寛骨・左右大腿骨・左右脛骨・左右腓骨と左右指骨の一部が遺存している。寛骨大坐骨切痕角・恥骨下角は狭く、大腿骨粗線・脛骨ヒラメ筋線は発達している。

〔性別と年齢〕性別は、眼高上隆起・外後頭隆起・乳様突起・四肢骨が発達し、寛骨大坐骨切痕角・恥骨下角も狭いことから男性と判定される。年齢は、頭蓋縫合の閉鎖状況・歯牙咬耗度および椎骨に骨棘が見られることから老年と推定される。

〔形質〕頭蓋は、最大長が194.0・最大幅142.0・Ba-Br高138.5であり、比較群中でも大きい値である。頭長幅示数(8/1)は73.2で長頭型、頭長高示数(17/1)は71.4で中頭型に属する。これは比較群中最も低い値であり、中でも豊後古墳集団に近い値を示す。上顔高は72.8であり比較的高く、原田・席田青木近世集団に近い値を示している。眼高は、幅41.3・高さ34.6で、示数(52/51)が83.9と高眼高に近い中眼高型に属する。鼻は、幅24.0・高さ51.2、示数(54/55)46.9と中鼻に近い狭鼻型で、比較群中最も低い値である。歯槽側面角は71°と、過突顎に近い突顎型で、比較群中にやや高い値を示す。

〔特記事項〕右側尺骨近位関節面と椎骨に骨棘が認められる。また、胸骨と右第1肋骨が完全に癒合しており、右仙腸関節にも癒合が認められる。

【15号人骨】

〔保存状態〕本人骨の保存状態は比較的良好である。頭蓋は前頭骨の左半分および右頭頂骨と左頭頂骨の冠状縫合・ラムダ縫合付近および右側頭骨・頬骨・上顎骨・下顎の右側の一部が遺存している。冠状縫合・矢状縫合は内・外板ともに閉じている。歯牙も一部遺存しており、残存歯牙の歯式は以下の通りである。

×	×	×	×	×	/	/	/	/	/	/	/	M ¹	/	/
×	×	×	P ₂	×	×	×	×	×	×	○	×	×	×	×

歯牙咬耗度は橋原(1957)の2^abである。

躯幹骨は胸骨および肋骨と頸椎・胸椎・腰椎・仙骨が遺存している。上肢骨は左右鎖骨・左肩甲骨関節窩付近・左上腕骨の骨頭と左右上腕骨遠位側の一部および右橈骨・右尺骨が遺存している。上腕骨三角筋筋面は発達している。下肢骨は腸骨翼と恥骨枝付近を除く左右寛骨と骨頭を除く左大腿骨・遠位端を除く右大腿骨・右脛骨・遠位側を除く左脛骨・右腓骨と右距骨・踵骨が遺存している。寛骨大坐骨切痕角は狭く、大腿骨粗線・脛骨ヒラメ筋線は発達している。

〔性別と年齢〕性別は、大坐骨切痕角が狭く四肢骨も発達していることから男性と判定される。年齢は、歯牙咬耗度・歯槽の閉鎖状況および腰椎の骨棘から老年と推定される。

〔特記事項〕胸椎・腰椎に骨棘が認められる。

【16号人骨】

〔保存状態〕本人骨の保存状態はあまりよくない。頭蓋は左右側頭骨と後頭骨の大後頭孔付近が遺存しているのみである。歯牙が一部遺存しており、遺存歯牙の歯式は以下の通りである。

／	・ M ¹	・ m ²	／	／	／	／	／	／	／	／	・ m ²	・ M ¹	・ (M ²)
(M ₂)	・ M ₁	・ m ₂	／	／	／	／	／	／	／	／	・ m ₂	・ (M ₂)	・

第2大臼歯(M₂)はいずれも歯根が未形成である。

下肢骨は左右大腿骨・脛骨・腓骨の骨幹部が遺存している。

【性別と年齢】年齢は歯の萌出状況及び歯根の形成状況から7～8歳の小児と推定される。性別は判定可能な年齢に達していないため不明である。

【17号人骨】

【保存状態】本人骨の保存状態はよくない。頭蓋骨は前頭骨の右側の一部と右頭頂骨の一部と左頭頂骨の一部および右側頭骨と後頭骨の一部、さらに下顎の右半分が遺存している。外後頭隆起・乳様突起は発達している。冠状縫合・矢状縫合は内板が閉鎖している。歯牙も一部認められ、残存歯牙の歯式は以下の通りである。

／	／	／	・ P ²	・ P ¹	・ C	／	・ I ¹	／	／	／	／	／	／	／	／
M ₃	M ₂	×	×	×	C	／	／	／	／	C	P ₁	P ₂	／	M ₂	M ₃

歯牙の咬耗度は橋原(1957)の2^aである。

躯幹骨は、胸骨の一部・左右の肋骨数点・椎骨と仙骨の一部が遺存している。上肢骨は、鎖骨の一部・右上腕骨の一部・右桡骨頭・左尺骨の一部が遺存している。下肢骨は、右寛骨の一部・左右大腿骨・左右脛骨・腓骨の一部が遺存している。寛骨大坐骨切痕角は狭く、大腿骨粗線は発達している。

【性別と年齢】性別は、乳様突起・外後頭隆起・大腿骨粗線が発達しており、大坐骨切痕が狭いことから男性と判定される。年齢は、頭蓋縫合の閉鎖状況および歯牙咬耗度から熟年と推定される。

【18号人骨】

【保存状態】保存状態はあまりよくない。頭蓋骨は前頭骨の一部・右頭頂骨・後頭骨の一部・上顎骨の一部が遺存している。外後頭隆起・乳様突起は発達していない。冠状縫合は内・外板ともにほとんど閉じており、ラムダ縫合は内・外板ともに開いている。また、歯牙も一部認められ残存歯牙の歯式は以下の通りである。

／	／	○	・ P ²	・ P ¹	・ C	／	／	／	／	／	・ P ²	／	／	・ M ²
／	／	／	・ P ₂	／	・ C	／	／	／	／	C	／	・ M ₁	・ M ₂	○

歯牙の咬耗度は橋原(1957)の1^a b～2^a aである。

上肢骨は、右鎖骨の一部・右上腕骨・橈骨の一部が遺存している。下肢骨は、右寛骨の一部・右大腿骨骨体部・右脛骨と腓骨の一部・左の大腿骨と脛骨と腓骨の一部および足根骨が遺存している。大腿骨の粗線は発達していない。

【性別と年齢】性別は、乳様突起・外後頭隆起および大腿骨粗線が発達していないことから女性と判定される。年齢は、頭蓋縫合の閉鎖状況と歯牙咬耗度から成年と推定される。

【19号人骨】

【保存状態】本人骨の保存状態はよくない。頭蓋は頭頂骨の一部・側頭骨の一部・前頭骨の一部および左右鼻骨と上顎骨が遺存している。眼窩上隆起・外後頭隆起は発達している。矢状縫合は内・外板ともに閉じておりラムダ縫合は内・外板ともに開いている。歯牙も一部認められ、残存歯牙の歯式は以下の通りである。

$\begin{array}{cccccccc} / & / & P^2 & P^1 & / & / & / & / \\ / & / & / & / & / & / & / & / \end{array}$	$\begin{array}{cccccccc} / & / & / & / & / & / & / & / \\ / & I_2 & / & / & / & / & / & / \end{array}$
--	--

歯牙の咬耗度が橋原（1957）の2b⁺である。

四肢骨は大腿骨片と部位不明の骨片が遺存するのみである。

【性別と年齢】性別は、眼窩上隆起・外後頭隆起が発達していることから男性と判定される。年齢は、頭蓋縫合の閉鎖状況と歯牙咬耗度から熟年と推定される。

【20号人骨】

【保存状態】本人骨の保存状態は比較的良好い。頭蓋骨は前頭骨の一部・右側頭骨・左右上顎骨・下顎骨が遺存している。乳様突起は発達している。歯牙も遺存しており、残存歯式は以下の通りである。

$\begin{array}{cccccccc} c & & & & c & c & \cdot & \\ M^3 & M^2 & M^1 & P^2 & P^1 & C & I^2 & I^1 \\ \times & \times & \times & \times & C & \times & \times & \end{array}$	$\begin{array}{cccccccc} & & & & & & & c \\ I^1 & \Delta & C & P^1 & \Delta & M^1 & M^2 & M^3 \\ \times & \times & C & / & / & / & / & \end{array}$
---	---

歯牙の咬耗度は橋原（1957）の1^ac～3^aである。

躯幹骨は、頭椎・胸椎・腰椎・仙骨・肋骨の一部が遺存する。上肢骨は左鎖骨・左肩甲骨・左右上腕骨・左尺骨・左右橈骨と右側の指骨が一部遺存する。下肢骨は左右寛骨・左右大腿骨・右膝蓋骨・左右脛骨・右腓骨・右側足根骨・指骨が遺存している。寛骨大坐骨切痕角・恥骨下角は狭く、大腿骨粗線・脛骨ヒラメ筋線は発達している。

【性別と年齢】性別は、乳様突起・下肢骨が発達しており、大坐骨切痕・恥骨下角も狭いことから男性と判定される。年齢は歯牙咬耗度と歯槽の閉鎖状況から熟年後半以降と推定される。

【特記事項】左側肩甲骨の間筋窩に骨棘が認められる。

【21号人骨】

【保存状態】本人骨の保存状態は良くない。頭蓋は上顎・下顎骨の一部のみ遺存している。歯牙も遺存しており、残存歯牙の歯式は以下の通りである。

		•	•	•					•	•			
		(P ²)	(P ³)	(C)					(P ¹)	(P ²)			
(M ²)	M ¹	m ²	m ¹	c	I ²	I ¹	I ¹	I ²	c	m ¹	m ²	M ¹	(M ²)
(M ₂)	M ₁	m ₂	m ₁	c	I ₂	I ₁	I ₁	I ₂	c	m ₁	m ₂	M ₁	(M ₂)
			•	•					•	•	•		
			(P ₁)	(C)					(C)	(P ₁)	(P ₂)		
			•	•					•	•	•		

下肢骨は左右大腿骨・左右脛骨・左右腓骨の一部が遺存している。

〔性別と年齢〕性別は判定可能な年齢に達していないため不明である。年齢は、歯牙の萌出状況から8-9歳の小児と推定される。

〔特記事項〕上顎左右側切歯はともに円錐歯である。

【22号人骨】

〔保存状態〕本人骨の保存状態は良くない。頭蓋は前頭骨・左右側頭骨・後頭骨・上顎骨・下顎骨の一部が遺存している。残存歯牙の歯式は以下の通りである。

		•			•	•		•		•			
(M ¹)					(I ²)	(I ¹)	(I ¹)	(C)				(M ¹)	
		m ²	m ¹	c	i ²	/	i ¹	/	c	m ¹	m ²		
		m ₂	m ₁	c	i ₂	/	/	i ₂	c	m ₁	m ₂		
		•	•	•	•	•	•	•	•	•	•		
(M ₁)		(P ₁)	(C)	(I ₂)	(I ₁)	(I ₁)	(I ₂)	(C)				(M ₁)	
		•	•	•	•	•	•	•	•	•	•		

軀幹骨は第1頸椎から第4頸椎が遺存している。

〔性別と年齢〕性別は判定可能な年齢に達していないため不明である。年齢は、歯牙の萌出状況から6歳前後の幼・小児と推定される。

【23号人骨】

〔保存状態〕保存状態は比較的良好。頭蓋は右側の遺存状態が良くないが、頭頂骨・前頭骨・側頭骨・後頭骨・左頬骨の一部が遺存している。外後頭隆起・乳様突起は発達していない。冠状縫合・矢状縫合は内板は閉じており外板も閉じかけている。ラムダ縫合は内板は閉じており外板は開いている。歯牙も遺存しており残存歯牙の歯式は以下の通りである。

			•	•		•													
			/	M ¹	P ²	/	C	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/
M ₃	M ₂	○	P ₂	/	C	I ₂	/	/	I ₂	C	P ₁	○	×	M ₂	M ₃				
	c		c							•	•								

歯牙の咬耗度は橋原（1957）の1° a～3°である。この他にも齶歯により歯根のみが遺存している部位同定困難な大臼歯片が認められる。

躯幹骨は頸椎・胸椎・腰椎・仙骨・肋骨の一部が遺存する。上肢骨は右肩甲骨・左上腕骨・左右尺骨・左右桡骨が遺存するが、いずれも完存しない。下肢骨は、左腸骨の一部と右大腿骨の骨体の一部・左脛骨・腓骨の骨片が認められる。大腿骨粗線は発達していない。

〔性別と年齢〕性別は、乳様突起・外後頭隆起・大腿骨粗線が発達していないことから女性と判定される。年齢は、頭蓋縫合の閉鎖状況と歯牙咬耗度より、熟年と推定される。

【24号人骨】

〔保存状態〕保存状態は比較的良好。頭蓋は左右頭頂骨・後頭骨を除いた部分が遺存している。眼窩上隆起・外後頭隆起はあまり発達しておらず、乳様突起は発達している。主要三縫合は外板は全て開いており、内板は閉じている。歯牙も遺存しており残存歯牙の歯式は以下の通りである。

×	×	×	P ¹	C	×	×		I ¹	I ²	C	×	×	×	×					
×	×	×	P ₁	C	I ₂	I ₁		I ₁	×	C	P ₁	P ₂	×	×					

歯牙の咬耗度は橋原（1957）の1° c～3°である。

躯幹骨は頸椎と肋骨の破片が遺存している。上肢骨は、右鎖骨および肩甲骨の一部・左右上腕骨・左右尺骨・左右桡骨および右の中手骨の一部がそれぞれ遺存している。上腕骨三角筋粗面は発達している。下肢骨は、右寛骨・左右大腿骨・左右脛骨・右距骨の一部が遺存している。大腿骨粗線・脛骨ヒラメ筋線は発達している。

〔性別と年齢〕性別は眼窩上隆起・外後頭隆起はあまり発達していないものの、乳様突起・下肢骨が発達していることから男性と判断される。年齢は、頭蓋縫合の閉鎖状況と歯牙咬耗度・歯槽の閉鎖状況から熟年～老年と推定される。

〔形質〕頭蓋最大幅144.0・Ba-Br高143.0と比較群中最も大きい値を示す。頭幅高示数(17/8)は99.3で中頭型に属する。顔面頭蓋は、頬骨弓幅132.5・中顔幅101.3・上顔高70.2であり、頬骨弓幅と上顔高は比較群中に最も低い値を示すが、中顔幅は比較近世集団の平均値と近似した値である。コルマンの上顔示数(48/45)が53.0で中上顔型、ウィルヒョウ上顔示数(48/46)が69.3で低顔型に属する。コルマンの上顔示数は、比較群中稲荷谷を除く近世集団と西南日本・畿内の現代集団の値に近く、ウィルヒョウ上顔示数は豊後古墳集団と吉母浜中世集団に近い値である。眼窩は、幅24.6・高さ53.1であり、示数(52/51)が88.7で高眼窩型に属する。これは比較群中最も高い値を示す。鼻は、幅24.6・高さ53.1、示数(54/55)46.4と、狭鼻型に属し、比較群中最も低い値である。歯槽側面角は70°で過突顎に近い突顎型に属する。

〔特記事項〕右上腕骨の遠位関節面に骨棘が認められる。下顎右犬歯に多量の歯石の沈着が認められる。

【25号人骨】

【保存状態】 本人骨の保存状態はよくない。頭蓋は、右上顎骨・側頭骨・後頭骨の一部が遺存している。乳様突起は発達していない。歯牙も一部遺存しており残存歯牙の歯式は以下の通りである。

/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	C	/	/	/	/
×	×	×	P ₂	P ₁	×	×	×	×	×	×	×	/	/	/	/

歯牙の咬耗度は橋原（1957）の1b°～2° aである。

軀幹骨は、肋骨・椎骨の破片が遺存する。上肢骨は、右鎖骨の骨体部・右肩甲骨片・右上腕骨片が遺存している。下肢骨は、右大腿骨の一部と右脛骨・腓骨の骨片が遺存する。大腿骨粗線はやや発達している。

【性別と年齢】 性別は、大腿骨粗線がやや発達しているものの乳様突起が発達していないことから女性の可能性が高いと考えられる。年齢は、歯牙咬耗度と歯槽閉鎖状況から老年と推定される。

【26号人骨】

【保存状態】 本人骨の保存状態は良くない。頭蓋は右側頭骨の一部が遺存しており、歯牙は上顎左右側切歯のみが遺存している。歯牙の咬耗度は橋原（1957）の1° bである。

上肢骨は右上腕骨の一部のみが遺存している。下肢骨は左右寛骨・左大腿骨の一部が遺存している。

【性別と年齢】 性別は判定可能な部位が遺存していないため不明である。年齢は歯牙咬耗から成年と推定される。

【28号人骨】

【保存状態】 本人骨の保存状態はあまり良くない。頭蓋骨は、乳様突起を含む右側頭骨・後頭骨の一部・左頬骨を除いた顔面部と上顎・下顎骨の一部が遺存している。外後頭隆起・乳様突起は発達している。歯牙も遺存しており残存歯牙の歯式は以下の通りである。

M ³	M ²	M ¹	P ²	P ¹	C	I ²	I ¹	○	I ²	C	P ¹	P ²	M ¹	M ²	M ³
M ₃	M ₂	M ₁	P ₂	P ₁	C	I ₂	/	I ₁	○	C	P ₁	P ₂	M ₁	M ₂	M ₃

歯牙の咬耗は橋原（1957）の1° bである

軀幹骨は頸椎・軸椎が遺存している。上肢骨は右鎖骨の一部が遺存している。下肢骨は左右大腿骨骨体部と左右脛骨・腓骨の骨片が遺存している。大腿骨粗線は発達している。

【性別と年齢】 性別は、外後頭隆起・乳様突起・大腿骨粗線が発達していることから男性と判定される。年齢は歯牙咬耗度から成年であると考えられる。

【形質】 上顔高は72.5で、比較群中では中間的な値を示す。鼻は、幅24.8・高さ56.3・示数(54/55)が44で狭鼻型に属し比較群中最も低い値である。

【29号人骨】

【保存状態】 本人骨の保存状態はあまり良くない。頭蓋は頭蓋冠から下顎にかけてほぼ矢状面右側の範囲で帯状に遺存する。また左右側頭骨の外耳孔付近のみ遺存している。冠状縫合・矢状縫合は外板は開

いており内板がほとんど閉じている。歯牙も遺存しており残存歯牙の歯式は以下の通りである。

c [•]	c [•]	c	c	c	c [•]		•	•	•	•	•	•		
M ²	M ¹	P ²	P ¹	C	I ²	O	I ¹	/	C	/	P ²	M ¹	M ²	M ³
×	×	×	P ₁	C	O	/	/	I ₂	/	/	/	/	/	/

歯の咬耗は柗原 (1957) の 1° c~2° b である。

躯幹骨は、環椎・軸椎が遺存している。上肢骨は左鎖骨が遺存している。下肢骨は左寛骨の一部・左大腿骨片・左右脛骨片・左腓骨片・左右足根骨・右中足骨の一部が遺存している。

〔性別と年齢〕性別は、判定可能な部位が遺存していないため不明である。年齢は、歯牙咬耗度・歯槽の閉鎖状況から熟年と推定される。

【31号人骨】

〔保存状態〕本人骨の保存状態はよくない。右大腿骨骨体の一部と少量の骨片が遺存する。

〔性別と年齢〕年齢と性別は判定可能な部位が遺存していないため不明である。

【32号人骨】

〔保存状態〕本人骨の保存状態は比較的良好い。頭蓋は前頭骨・左右頭頂骨・右側頭骨・右頬骨・右上顎骨・下顎骨の一部が遺存している。歯牙も一部遺存しており残存歯牙の歯式は以下の通りである。

×	×	×	/	C	/	/	/	/	/	/	/	/	/
M ₂	M ₁	P ₂	P ₁	C	/	/	/	/	/	/	/	/	/

歯牙の咬耗度は柗原 (1957) の 3° である。

躯幹骨は、左右肋骨・胸骨・椎骨の一部が遺存している。上肢骨は左肩甲骨・左右上腕骨・左右橈骨・左右尺骨・指骨の一部が遺存している。上腕骨三角筋粗面は発達している。下肢骨は左右寛骨・左右大腿骨・左膝蓋骨・左右脛骨・左右腓骨・指骨の一部が遺存している。寛骨大坐骨切痕角・恥骨下角は狭く、大腿骨粗線は発達している。

〔性別と年齢〕性別は、寛骨大坐骨切痕角・恥骨下角が狭く四肢骨も発達していることから男性と判定される。年齢は、歯牙咬耗度および歯槽の閉鎖状況から老年と推定される。

【33号人骨】

〔保存状態〕本人骨の保存状態はよくない。右側頭骨の外耳孔周辺の破片と頭蓋骨の骨片が少量遺存する。遺存している頭蓋片は非常に薄い。

〔性別と年齢〕性別は判定可能な部位が遺存していないため不明である。年齢は、頭蓋骨が薄いことから未成人と推定される。

【34号人骨】

〔保存状態〕本人骨の保存状態はよくない。頭蓋骨は、右側頭骨錐体付近および部位不明な骨片が遺存する。歯牙は上顎右第一小白歯・第一大臼歯が遺存しているのみである。歯牙咬耗度は柗原 (1957) の 3° である。

上肢骨は左肩甲骨・左上腕骨の一部が遺存している。下肢骨は左大腿骨・左脛骨片のみが遺存している。以上の他に部位が判別困難な骨片が多数遺存している。

〔性別と年齢〕性別は判定可能な部位が遺存していないため不明である。年齢は歯牙の咬耗度より熟年と推定される。

【36号人骨】

〔保存状態〕本人骨の保存状態は比較的良好。頭蓋は左右頭頂骨の一部・左右側頭骨の一部・後頭骨・蝶形骨・上顎骨・下顎骨が遺存している。外後頭隆起・乳様突起は発達していない。矢状縫合・ラムダ縫合は内・外板ともに開いている。歯牙も遺存しており残存歯牙の歯式は以下の通りである。

		c			c										c	c
○	○	M ¹	P ²	○	C	○	I ¹	I ¹	I ²	C	○	P ²	×	M ²	M ³	
M ₃	M ₂	×	P ₂	P ₁	C	I ₂	○	I ₁	○	○	P ₁	P ₂	M ₁	M ₂	M ₃	
	c														c	

歯牙の咬耗度は、橋原(1957)の1° a~1° bである。

軀幹骨は、胸骨柄・胸骨体の一部・左鎖骨・頸椎と椎骨片数点が遺存している。上肢骨は、左右上腕骨・左右尺骨・左右桡骨が遺存している。上腕骨三角筋粗面はやや発達している。下肢骨は、左右大腿骨・左右脛骨・左右腓骨と足根骨と指骨数点が遺存する。大腿骨粗線は発達していない。

〔性別と年齢〕性別は、上腕骨三角筋粗面がやや発達しているものの、外後頭隆起・乳様突起・下肢が発達していないことから女性と判定される。年齢は歯牙咬耗度と頭蓋縫合から成年と推定される。

〔特記事項〕左大腿骨の内側筋附着部に膨隆が認められる。また、左右の脛骨・腓骨に重度の骨膜炎による骨増殖と貫通が認められる。左前腕近位および右楔状骨にも骨膜炎による骨表面の粗像がみられる。

【37号人骨】

〔保存状態〕本人骨の保存状態は良好。頭蓋は前頭骨と右頭頂骨の冠状縫合付近と後頭骨の右ラムダ縫合付近を除いた部分が遺存している。眼窩上隆起・外後頭隆起・乳様突起は発達している。頭蓋主要三縫合は外板が開き内板は閉じている。歯牙は遺存しておらず、歯槽はすべて閉鎖している。

軀幹骨は頸椎・胸椎・腰椎・仙骨と胸骨および肋骨が遺存している。上肢骨は左鎖骨・左肩甲骨・骨頭をのぞく左右上腕骨・遠位部を除く左右桡骨・尺骨が遺存している。上腕骨三角筋粗面は発達している。下肢骨は恥骨を除く左右寛骨・骨頭を除く左右大腿骨・左右脛骨および右腓骨体部片が遺存している。左右距骨、踵骨も遺存している。大腿骨粗線・脛骨ヒラメ筋線は発達している。

〔性別と年齢〕性別は眼窩上隆起・外後頭隆起・乳様突起および四肢骨が発達していることから男性と判定される。年齢は歯槽が全て閉鎖していることから老年と推定される。

〔形質〕頭蓋最大幅は136.0と比較的に狭く、原田近世集団と吉母浜中世集団に近い値を示す。顔面頭蓋は、中顔幅が107.1で非常に広い。眼窩幅は38.7と非常に狭く、高さが36.0で比較的高い値を示す。その結果、示数(52/51)は93.0で非常に高く、高眼窩型に属する。鼻は、幅28.4・高さ54.5で比較的に広くて高さが高い値のため、示数(54/55)が52.1であり広鼻型になる。これは、比較群の近世集団の中で原田青木近世集団に次いで高い値である。

〔特記事項〕腰椎に骨棘が認められる。

【39号人骨】

〔保存状態〕 本人骨の保存状態はやや良好である。頭蓋は、前頭骨の一部・矢状縫合付近の右頭頂骨・左右側頭骨の一部・後頭骨の一部・上顎骨の一部・右下顎頭から右下顎角までを除く下顎骨の一部が遺存している。外後頭隆起は発達していない。矢状縫合・ラムダ縫合の内板は閉じている。歯牙も遺存しており、残存歯牙の歯式は以下の通りである。

M ³	M ²	M ¹	P ²	P ¹	C	I ²	I ¹	I ¹	I ²	C	P ¹	P ²	M ¹	M ²	M ³
M ₃	M ₂	M ₁	P ₂	P ₁	C	I ₂	I ₁	I ₁	I ₂	C	P ₁	P ₂	M ₁	M ₂	M ₃

歯牙の咬耗度は橋原(1957)の2° bである。

躯幹骨は、肋骨片・頸椎・腰椎の一部・仙骨の一部が遺存している。上肢骨は、左右鎖骨の一部・左右肩甲骨の一部・左右上腕骨・左右尺骨と右橈骨の一部・基節骨数点が遺存している。上腕骨三角筋粗面はあまり発達していない。下肢骨は、左右寛骨の一部・左右大腿骨・左右脛骨の一部・右腓骨の一部・右膝蓋骨・左右の足根骨と指骨の一部が遺存している。寛骨大坐骨切痕角は狭い。大腿骨粗線・脛骨ヒラメ筋線は発達していないものの、大腿骨の骨体中央は太い。

〔性別と年齢〕 性別は、外後頭隆起・四肢はあまり発達していないが、大坐骨切痕角が狭いことから男性と判定される。年齢は、歯牙咬耗度・頭蓋縫合閉鎖状況から熟年と推定される。

〔特記事項〕 腰椎に激しい骨棘が認められる。

【40号人骨】

〔保存状態〕 本人骨の保存状態は良い。右頭頂骨の一部・右頬骨・左右頬骨弓・右側頭骨・左下顎頭を除いた部分が遺存している。眼窩上隆起・乳様突起は発達しておらず、外後頭隆起はやや発達している。頭蓋主要三縫合は外板は開いており、内板は冠状・矢状縫合は閉じかけておりラムダ縫合は閉じている。歯牙も遺存しており残存歯牙の歯式は以下の通りである。

	c	.						.					.		
○	M ²	M ¹	P ²	P ¹	C	I ²	○	I ¹	I ²	○	P ¹	P ²	M ¹	M ²	
M ₃	×	×	P ₂	P ₁	C	I ₂	I ₁	I ₁	I ₂	C	P ₁	P ₂	M ₁	×	○

歯の咬耗は橋原(1957)の1° b～2° aである。

躯幹骨は肋骨の一部・頸椎・胸椎・腰椎・仙骨の一部が遺存している。上肢骨は、左右鎖骨・左右上腕骨・左右橈骨・左右尺骨および左右の手根骨・中手骨・指骨の一部が遺存している。上腕骨三角筋粗面は発達していない。下肢骨は左右大腿骨・右脛骨・左右腓骨骨体部・左脛骨・左膝蓋骨・左中足骨の一部が遺存している。大腿骨粗線・脛骨ヒラメ筋線は発達していない。

〔性別と年齢〕 性別は、外後頭隆起がやや発達しているものの、眼窩上隆起・乳様突起および四肢骨は発達していないことから女性と判定される。年齢は、頭蓋縫合の閉鎖状況と歯牙咬耗度から成年と推定される。

〔形質〕 頭蓋最大長は174.0でやや大きい。Ba-Br高が124.5と非常に低いため、頭長高示数(17/1)は71.6となり、過長頭に近い長頭型に属する。顔面は、顔高が113.1で比較群の平均値に近い値であり、

上顔高が67.3であり比較群中やや低い値である。眼高は、幅が39.5で比較群中最も狭く高さが34.7で比較的高いため、示数(52/51)は88.0で高眼高型である。眼高に関しては、稲荷谷近世集団と近似した値である。鼻は、幅が25.5と比較群の平均値と近いが高さが47.8で非常に低いため、示数(54/55)は53.4で広鼻型に属する。これは北部九州弥生集団や吉母浜中世集団・吉原近世集団と近い値を示している。歯槽側面角は67°で過突顎型である。

【41号人骨】

〔保存状態〕 本人骨の保存状態は良い。頭蓋は右頭頂骨・側頭骨・後頭骨を除いた部分が遺存している。乳様突起は発達していない。頭蓋主要三縫合は外板は開いており、内板はラムダ縫合は閉じており冠状縫合・矢状縫合はほとんど閉じている。歯牙も遺存しており残存歯牙の歯式は以下の通りである。

M ³	M ²	M ¹	Δ	P ¹	C	I ²	I ¹	I ¹	I ²	Δ	Δ	P ²	M ¹	M ²	(M ³)
M ₂	M ₁	P ₂	P ₁	C	I ₂	I ₁	I ₁	I ₂	C	P ₁	P ₂	M ₁	M ₂		

歯の咬耗は橋原(1957)の1° c~2° bである。

軀幹骨では、肋骨・胸骨・頸椎・胸椎・腰椎・仙骨の一部が遺存している。上肢骨は左上腕骨・、橈骨・尺骨の一部・左右指骨の一部が遺存している。上腕骨三角筋筋面は発達している。下肢骨は左右大腿骨骨体・脛骨・腓骨・左右足根骨・中足骨の一部が遺存している。寛骨大坐骨切痕角は狭く、大腿骨粗線・脛骨ヒラメ筋線は発達している。耳状面に微細な多孔質像(Lovejoy, 1985)がみられる。

〔性別と年齢〕 性別は、乳様突起は発達していないものの、大坐骨切痕角が狭く四肢骨が発達していることから男性と判定される。年齢は、頭蓋縫合の閉鎖状況と歯牙咬耗度および耳状面から熟年後半であると推定される。

〔形質〕 顔面頭蓋は、中顔幅が102.3と北部九州弥生人を除いて比較群中最も広く、顔高が120で低い方であり、上顔高は71.1と低い値を示す。ウィルヒョウ顔示数(47/46)は117.3・上顔示数(48/46)は69.5とともに低顔型に属する。これは北部九州弥生集団、吉母浜中世集団に近い値になっている。眼高は、幅が40.8、高さが35.5であり、比較群中では幅は最も狭く高さは高い値である。眼高示数(52/51)は87と高眼高型であり、比較群中最も高い値である。鼻は、幅28.0・高さ52.6であり、鼻示数が53.1で広鼻型に属する。歯槽側面角は71°で過突顎に近い突顎である。

〔特記事項〕 左側肩甲骨関節窩・右側橈骨遠位関節・左右大腿骨頭に骨棘が認められる。左右大腿骨・脛骨・腓骨に骨膜炎がみられる。

【44号人骨】

〔保存状態〕 本人骨の保存状態はよくない。頭椎と胸椎の椎体がそれぞれ1点遺存するのみである。

〔性別と年齢〕 年齢と性別は判定可能な部位が遺存していないため不明である。

【47号人骨】

〔保存状態〕 本人骨の保存状態は良くない。頭蓋は前頭骨・左右頭頂骨・後頭骨・左右側頭骨・上顎骨の一部が遺存している。冠状縫合は内・外板ともに開いている。歯牙も遺存しており、残存歯牙の歯牙は以下の通りである。

〔性別と年齢〕性別は、乳様突起・下肢が発達しており、大坐骨切痕の角度も狭いことから男性と推定される。年齢は、頭蓋縫合の閉鎖状況と歯牙咬耗度から成年と推定される。

〔特記事項〕大腿骨頭・寛骨臼に骨棘が認められる。

【51号人骨】

〔保存状態〕本人骨の保存状態は比較的良好。頭蓋は、前頭骨の一部・右頬骨・右側頭骨・左側頭骨の一部・左右頭頂骨の一部・後頭骨の一部・下顎骨が遺存している。下顎歯はすべて脱落し、歯槽が閉鎖している。外後頭隆起・乳様突起は発達している。ラムダ縫合は内板が閉じている。

軀幹骨は、椎骨・肋骨の一部・胸骨・仙骨が遺存している。上肢骨は、右鎖骨の一部・左鎖骨・右肩甲骨・左上腕骨・左右橈骨、左右尺骨の一部・左右の手根骨・中手骨・指骨の一部が遺存している。下肢骨は、左右寛骨・左右大腿骨・左右脛骨・左右腓骨・左右の足根骨・中足骨・指骨の一部が遺存している。寛骨大坐骨切痕角・恥骨下角は狭く、大腿骨粗線・脛骨ヒラメ筋線は発達している。

〔性別と年齢〕性別は、外後頭隆起・乳様突起および下肢が発達しており、寛骨大坐骨切痕角・恥骨下角が狭いことから男性と判定される。年齢は頭蓋縫合の閉鎖状況と歯槽の閉鎖状況から老年と推定される。

〔形質〕歯槽側面角は71°で突顎であり、比較群の近世集団の中では大きめの値である。

〔特記事項〕腰椎に骨棘が認められる。

【52号人骨】

〔保存状態〕本人骨の保存状態は良くない。頭蓋は、前頭骨と上顎骨の右側・頭頂骨の一部・後頭骨の一部・右側頭骨の一部・下顎の一部が遺存している。また、歯牙も遺存しており残存歯牙の歯式は以下の通りである。

				(C)	(I ²)										
		c													
(M ²)	M ¹	m ²	m ¹	/	/	/	/	/	/	c	/	/			
(M ₂)	M ₁	m ₂	m ₁	c	i ₂	/	i ₁	i ₂	c	m ₁	m ₂	M ₁			
				(I ₂)	(I ₁)		(I ₁)	(I ₂)	(C)						

軀幹骨は、頸椎2点・肋骨数点が遺存している。上肢骨は、右鎖骨の一部・左肩甲骨の一部・右上腕骨と橈骨と尺骨の一部が遺存している。下肢骨は、左右の寛骨の一部・左右大腿骨骨幹部・左右脛骨骨幹部・左右腓骨が遺存している。

〔性別と年齢〕性別は判別可能な年齢に達していないため不明である。年齢は歯牙の萌出状態から6-7歳の小児と推定される。

【53号人骨】

〔保存状態〕本人骨の保存状態は良くない。頭蓋は、前頭骨・頭頂骨・後頭骨の一部・右外耳孔付近・下顎の一部が遺存している。冠状縫合・矢状縫合は外板が閉じかけており内板は閉じている。外後頭隆起はやや発達している。歯牙も一部遺存しており残存歯牙の歯式は以下の通りである。

／	M ¹	P ²	／	／	／	／	／	／	／	P ¹	P ²	／	／
／	／	／	／	△	○	○	○	／	／	／	／	／	M ₂

歯牙の咬耗度は 橋原(1957)の 2^aである。

躯幹骨は、頸椎片のみが遺存している。上肢骨は、左上腕骨体の一部・右上腕骨遠位の一部、左橈骨と尺骨の一部が遺存している。上腕骨三角筋粗面は発達している。下肢骨は、左大腿骨の一部が遺存している。大腿骨粗線は発達している。

〔性別と年齢〕性別は、外後頭隆起がやや発達しており、四肢骨も発達していることから男性と判定される。年齢は、頭蓋縫合の閉鎖状況と歯牙咬耗度から熟年と推定される。

【54号人骨】

〔保存状態〕本人骨の保存状態は良くない。頭蓋は、前頭骨の一部・頭頂骨の一部・左右側頭骨の一部・後頭骨の一部・右上顎・右下顎骨が遺存している。外後頭隆起・乳様突起は発達している。頭蓋主要三縫合は内板はほとんど閉じており、外板は冠状・矢状縫合がほとんど閉じておりラムダ縫合は閉じかけている。また、歯牙も一部遺存しており残存歯牙の歯式は以下の通りである。

○	×	○	／	○	／	／	／	／	／	／	／	／	／
×	×	○	○	○	○	○	／	／	／	／	／	／	M ₂

歯牙の咬耗度は 橋原(1957)の 2^bである。

上肢骨は、左鎖骨の一部・左右の上腕骨体の一部・左右尺骨の一部・左橈骨の一部と指骨の一部が遺存している。上腕骨三角筋粗面は発達している。下肢骨は、左右の大腿骨の一部・左右の脛骨の一部・右の膝蓋骨の一部が遺存している。大腿骨粗線は発達している。

〔性別と年齢〕性別は、外後頭隆起・乳様突起および四肢骨が発達していることから男性と判定される。年齢は、頭蓋縫合の閉鎖状況と歯牙咬耗度および歯槽の閉鎖状況から熟年以上と推定される。

4. まとめ

③形質的特徴について

【頭蓋形質】(表1・2・3・4)

脳頭蓋については、頭蓋最大長と頭蓋最大幅は男性が比較近世集団中中間的な値であり、女性は比較的小さい値を示す。頭長幅示数(8/1)は男性が73.2で長頭型、女性が78.0で中頭型に属する。Ba-Br高は、男女ともに古墳時代の値を除くと比較群中で最も低い。頭長高示数(17/1)は男性が73.2で中頭型、女性が75.5で高頭型を、頭幅高示数(17/8)は男性98.4、女性104.6で狭頭型に属する。

顔面部の特徴に関しては次の通りである。幅については、男性では頬骨弓幅132.5で比較群中最も低い値を示しているが、中顔幅は比較群のうち同じ豊後地域の稲荷谷集団を除いた近世集団と近似した値である。女性では中顔幅のみ計測可能であり、その値は94.8であり比較群のうち稲荷谷集団を除いた近

世集団と近似した値である。高さについては、男性では上顔高は71.6で比較群のうち稲荷谷・天福寺集団を除いた近世集団と近似した値である。女性に関しては、上顔高は63.8で比較近世集団中最も低い値であり、豊後古墳・吉母浜中世集団と近似した値である。示数を見ると、男性・女性ともに低顔の傾向が見られる。男性は、ウィルヒョウ顔示数(47/46)117.3、上顔示数(48/46)69.4で、各々低顔型と低下顔型に属する。コルマンの上顔示数(48/45)は53.0で中上顔型に属する。一方、女性はウィルヒョウ顔示数(47/46)が116.3で低顔に型に属し、ウィルヒョウ上顔示数(48/46)は65.4であり低下顔型に属する。眼窩高は、男性・女性ともに比較近世集団中稲荷谷集団を除いた他近世集団とほぼ近似した値である。眼窩幅は男女ともに比較群中最も小さい値を示している。眼窩示数(52/51)は、男性が85.9で高眼窩型に属し、女性も89.6で高眼窩型に属する。この値は、男女ともに比較群の全集団中最も高眼窩傾向を示す値であり眼窩幅の小ささが効いていると考えられる。鼻幅・鼻高は男女ともに比較群とほぼ近似した値を示す。鼻示数(54/55)は、男性が48.2中鼻型であり女性は52.7で広鼻型に属し、男女ともに同じ豊後地域の稲荷谷近世集団と近似した値である。歯槽側面角は、男性が70.5°で過突型に近い突型に属し、他の近世集団と近似した値である。女性は74.3°で突型に属し全比較集団中最も突型傾向が弱い。

下顎については、男性は下顎間幅が広く、下顎角幅・下顎枝幅は他集団とくに稲荷谷近世集団と近似した値である。下顎骨長は比較群中最も短く、オトガイ高は原田近世集団を除く他の比較集団と近似した値である。下顎枝示数(71/70)は53.0であり、原田近世集団を除く他の近世集団とほぼ近似した値である。女性に関しては、下顎角幅・下顎枝幅ともに他の近世集団と近似した値であり、下顎骨長は稲荷谷を除く他の近世集団と近似した値である。下顎枝高は湯島近世集団・北部九州弥生集団同様高い値を示すが、オトガイ高は稲荷谷近世集団・吉母浜中世集団と近似しており比較群の中で最も低い値を示している。下顎枝示数は51.1で湯島近世集団・現代西南日本集団と近似した値であり比較群中では下顎骨体部が薄い傾向を示す。

上記の祇園原近世集団の頭蓋の形態的特徴を比較集団の中で総合的に検討するために、頭蓋計測10項目(頭蓋最大長・最大幅・Ba-Br高・頬骨弓幅・中顔幅・上顔高・眼窩幅・眼窩高・鼻幅・鼻高)、女性に関しては頬骨弓幅を除く9項目を用いて主成分分析を行った(表9・表10・図4・図5)。男性の分析結果を見ると、第1主成分は+に位置するほど眼窩・鼻高頭蓋が高く、-になるほど頭蓋最大長・中顔幅・鼻幅が大きくなることを示している。第2主成分は+に位置するほど頬骨弓幅・上顔高・眼窩幅・鼻幅が大きくなることを示している。各集団の第1主成分得点と第2主成分得点の二次元展開図を見ると、祇園原近世集団の男性は比較集団の中で、第1主成分得点は中間的な値を示しているものの、第2主成分得点は最も低い。これは眼窩幅・頬骨弓幅が比較群中低い値を示すことによると考えられる。他集団との類似性について見ると、吉母浜中世集団と最も近いが、同じ豊後国の稲荷谷近世集団とは大きく離れている。次に、女性の分析結果を見ると、第1主成分得点は+に位置するほど頭蓋最大幅・上顔高・眼窩幅・鼻高・Ba-Br高が大きいことを示している。第2主成分得点は+に位置するほど頭蓋最大長・中顔幅が大きく、-に位置するほど眼窩高が高いことを示している。祇園原近世集団の女性は比較集団の中で、第2主成分は中間的な値を示しており、第1主成分は小さい値を示す。これは、眼窩幅・上顔高が比較群中低い値を示すことによると考えられる。他集団との類似性についてみると、いずれの集団からも離れた位置に分布しているが、原田近世集団に最も近い。

以上の分析の結果を総合すると、男性・女性ともに眼窩幅が狭く高眼窩傾向であり低顔傾向であると

いう祇園原近世集団の形質的特徴を見出すことができる。これらの傾向は、同じ豊後地方の稲荷谷近世人とでは高眼窩傾向という点において共通した特徴がみられるが、低顔という点に関しては異なる。上顔高に関しては、男性は他近世集団と近似した値であり、女性も稲荷谷・天福寺を除く他近世集団と近似した値であり、特に小さい値を示すという傾向にはない。一方で、顔幅に関しては、祇園原集団においては他近世集団と近似した値であるのに対し稲荷谷近世集団においては低い値を示す。したがって、この2集団間の相違点は稲荷谷近世集団の顔幅の狭さに起因すると考えられる。稲荷谷近世集団の形質的特徴は畿内の近世集団や現代集団と類似していることが示されており、その要因として近畿地方からの人口移動の可能性が指摘されている。稲荷谷近世集団の多くが武士層と考えられており、中世末期の転封によって近畿地方から移住してきた集団の子孫であったため、その影響により近畿地域との類似が生まれた可能性が想定されている（岡崎ほか、2004）。そのため、祇園原近世集団と稲荷谷近世集団の形質的違いは、集団の遺伝的背景の違いに起因する可能性が高い。一方で、豊後古墳集団とは顔高が低いという共通点がみられるものの、高眼窩という点では異なっている。同じ豊後地域の千人塚遺跡中世集団の形質的特徴(舟橋他1999)でみられた、豊後古墳集団と共通した特徴と高眼窩という北部九州弥生・古墳集団に共通した特徴がみられるという現象と類似している。これら当該地域の古代以降の人の移動に伴うと考えられる形質的特徴の変化の可能性に関しては、今後の資料の増加をもって改めて検討する必要がある。

【四肢骨形質】(表5・6・7・8)

(1) 上肢骨

上腕骨について、長径は十分な資料数が無いために比較が難しいが、周径に関しては男女間で異なる傾向を示している。男性は比較群の中では細く、女性は逆に比較群の中で太い。骨体断面示数は、男性は扁平度が強く、女性は扁平度が弱い。

前腕骨も上腕骨と同様に周径のみが比較可能である。橈骨は男女ともに資料数が少ないものの、他の近世人集団と比較して大きな違いは無い。尺骨は比較群の中で男女ともに横径が大きいので、断面示数が扁平な傾向を示している。

(2) 下肢骨

大腿骨では、長径を得られたのは男性2個体のみである。その値を見ると、現代九州人より大きいものの、他の近世人集団と比較すると天福寺集団と同程度である。中央周では、男性は比較集団の中で大きく、他集団よりも頑丈な傾向がうかがえる。女性については原田や天福寺集団と同程度であり、男性とは異なる様相が確認できる。中央断面示数に注目すると、男女ともに中央横径が比較的大きいために、顕著な柱状傾向は見られない。上骨体断面示数を見ると、男女ともに骨体横径が大きいために扁平性が強いことが確認できる。脛骨は、男性の長径は比較集団の中で天福寺集団に次いで大きい、女性の長径は比較集団の中で最も低い値を示している。周径については、男女ともに比較集団の中で中間的な値を示している。ただし、女性の中央断面示数に注目すると、稲荷谷集団に近い値を示し、他の近世人集団と比べると扁平性が強い。ただし、資料数が少ないため、この傾向が当時の集団全体のものかどうかについては議論の余地がある。腓骨は男女ともに長径のデータを得ることができなかった。周径については、男性は比較集団の中で中間的な値を示しているが、女性については中央周と最少周がともに大きく、頑丈な傾向がうかがえる。ただし、脛骨と同様に資料数は少ない。

(3) 推定身長

大腿骨最大長にピアソンの推定式を適用して身長を算出している(表11)。算出できたのは14号と40号人骨のみである。14号人骨は159.9cm、40号人骨は158.8cmとなり、両個体ともに他の近世人集団の平均値から若干低いものの、ほぼ平均的な身長と言える。

②病変について

祇園原遺跡出土の近世人骨資料の中にはいくつかの病的所見が認められ、その多くが関節疾患である。1号・9号・11号・14号・15号・37号・39号・40号・51号人骨に変形性脊椎症が認められる。また、1号人骨の右側肩関節と肘関節、4号人骨の右側橈骨の手根関節面、9号人骨の右側肩関節と両側膝関節、14号人骨の右側肘関節、20号人骨の左側肩関節、24号人骨の右側肘関節、40号人骨左側の肩関節と肘関節と左右の股関節に骨棘が認められた。14号人骨の胸骨と右第1肋骨が完全に癒合しており、年齢が老年であることからこれは加齢性的変化と考えられる。また、36号人骨の左前腕骨と下肢骨に骨膜炎および骨髄炎による骨増殖が認められる。

歯牙の疾患としては、2号・29号・36号・41号人骨に齲蝕が認められる。また、2号人骨の下顎右側切歯は先天的に欠如していたと考えられる。

5. おわりに

人骨の出土状況および人骨そのものから得られた祇園原近世集団の埋葬習俗・形質的特徴は以下のようにまとめることができる。

- ・埋葬姿勢は座葬(正面北・北西・北東向き)もしくは屈葬(20号を除きすべて北頭位・顔面西向き)である。
- ・頭型は、男性は長頭型に女性は中頭型に属し、男女ともに低顔である。
- ・眼高は男性が中眼高に近い高眼高、女性が高眼高型に属する。
- ・男性・女性ともに他の近世集団と同様に突顎傾向が見られる。
- ・四肢骨は個体数が少ないものの、他の近世人集団と比較して大きな違いは見られない。ただし、女性に関しては比較集団の中でやや頑丈な傾向が見られる。
- ・推定身長は男性のみ算出可能であり、他の近世人集団の中で平均的な値である。

謝辞

本報告を行うにあたり日田市教育委員会の渡邊隆行氏・行時桂子氏をはじめ各位に多くのご配慮を賜りました。深謝いたします。

《参考文献》

- 阿部英世(1955) 現代九州人大腿骨の人類学的研究。人類学研究。2
- 石川健・舟橋京子・田中良之(2002) 郡山南遺跡出土人骨について、大野地区遺跡群発掘調査報告書Ⅲ、大野町教育委員会
- Vallois H.V. (1938) Les methodes de mensuration de la platycnemieetude critique. Bulletin of Society of Anthropology
- 岡崎健治・重松辰治・舟橋京子・石川健・田中良之(2004) 稲荷谷近世墓地群から出土した近世人骨、国遺502号改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書、竹田市教育委員会
- 欠田早苗(1959) 畿内人頭骨の人類学的研究。人類学報。25
- 九州大学医学部解剖学第二講座編(1988) 日本民族・文化の生成2。九州大学医学部解剖学第二講座所蔵古人骨資料集成。六興出版。

- 鈴木尚 (1963) 日本人の骨. 岩波新書477, 東京
- 専頭時義 (1957) 現代九州日本人上腕骨の人類学的研究. 人類学研究, 4
- 舘岡命達 (1955) 九州人下腿骨の研究. 人類学研究, 2
- 栢原博 (1957) 日本人歯牙の咬耗に関する研究. 熊本医学会雑誌, 31
- Doi N. and Tanaka Y. (1987) A geographical cline in metrical characteristics of Kofun skulls from western Japan. *Anthropological Science*, 95
- 中橋孝博 (1987) 福岡市天福寺出土の江戸時代人頭骨. 人類学雑誌, 95
- 中橋孝博 (1993) 福岡市席田青木遺跡出土の弥生・近世人骨. 席田青木遺跡. 福岡市教育委員会
- 中橋孝博・土肥直美 (2008) 原田第1・2・40・41号墓地出土の近世人骨. 原田第1・2・40・41号墓地. 下巻. 筑紫野市教育委員会
- 中橋孝博・永井昌文 (1985) 山口黒吉母浜遺跡出土人骨. 吉母浜遺跡. 下関市教育委員会
- 中橋孝博・永井昌文 (1989) 弥生人の形質, 男女差, 寿命, 弥生文化の研究1. 雄山閣出版
- 原田忠昭, 1954. 西南日本人頭骨の人類学的研究. 人類学研究1
- 馬場悠男 (1991) 人体計測法 II 人骨計測法. 人類学講座別巻1. 雄山閣出版
- 舟橋京子・田中良之 (2004) 芝原近世墓地出土人骨について. 国遣502号改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 竹田市教育委員会
- 舟橋京子・井村公洋・金宰賢・田中良之 (1999) 千人塚出土人骨について. 千人塚遺跡. 緒方町教育委員会
- Martin-Saller (1957) *Lehrbuch der Anthropologie*. Bd.II. Gustav Fischer Verlag Stuttgart
- 溝口静男 (1957) 現代九州日本人前腕骨の人類学的研究. 人類学研究, 4
- 森田茂・川越逸行 (1960) 湯島無縁坂出土の江戸時代人頭蓋骨の人類学的研究 (補遺). 人類学雑誌, 67
- Lovejoy, C. Owen, R. S. Meind, L. R. Mensforth, and T. J. Barton (1985) Multifactorial Determination of Skeletal age at Death. *American Journal of Physical Anthropology*, 48

表5 上肢の計測値の比較 (男性)

(単位=mm)

Martin No.	砥原 (近世)			福荷谷 (近世)		天福寺 (近世)		原田 (近世)		席田青木 (近世)		九州 (現代)	
	n	M	S.D.	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M
上腕骨													
1 最大長	-	-	-	6	293.2	19	296.9	15	294.4	18	296.6	106	295.3
2 全長	-	-	-	8	287.0	15	293.3	15	290.3	16	292.6	106	290.6
5 中央最大径	4	21.8	1.64	6	22.7	20	22.9	22	22.8	30	24.1	106	21.9
6 中央最小径	4	16.3	1.92	6	18.5	20	17.7	22	17.8	30	18.6	106	16.9
7 骨体最小周	4	58.8	4.44	16	62.3	21	63.8	28	63.5	28	67.1	106	61.8
7a 中央周	3	64.7	3.40	6	64.5	20	66.5	22	67.8	30	70	106	63.7
6/5 骨体断面示数	4	74.8	7.13	6	81.8	20	77.6	22	78.4	3	77.3	106	79.1
7/1 長厚示数	-	-	-	-	21.1	17	21.3	15	21.4	17	22.6	106	20.9
桡骨													
1 最大長	-	-	-	5	219.6	12	228.5	14	225.8	19	231.4	64	219.9
2 機能長	-	-	-	7	207.7	11	212.2	17	211.8	14	215.9	64	208.2
3 最小周	1	46.0	-	12	39.8	16	42.2	30	43.6	26	44.9	63	40.1
4 骨体横径	3	17.0	0.82	14	17.5	16	17.5	32	17.1	27	18.3	63	16.0
4a 骨体中央横径	1	15.0	-	5	15.2	14	17.5	18	15.8	22	16.9	63	15.2
5 骨体矢状径	3	12.3	0.47	14	12.2	16	12.6	32	12.2	27	13.2	63	11.7
5a 骨体中央矢状径	1	12.0	-	5	12.2	14	12.6	18	12.4	22	13.3	63	11.9
3/2 長厚示数	-	-	-	6	18.9	11	19.8	16	20.5	14	20.4	61	20.4
5/4 骨体断面示数	3	72.7	4.32	14	70.0	14	80.3	32	71.7	27	72.6	60	71.4
5a/4a 中央断面示数	1	80.0	-	5	80.3	14	80.3	18	79.1	22	78.8	40	77.9
尺骨													
1 最大長	-	-	-	6	236.2	11	244.6	10	247.8	15	249.8	62	236.2
2 機能長	-	-	-	11	206.8	11	214.6	14	216.7	13	222.6	64	209.2
3 最小周	2	42.0	3.00	12	34.8	12	37.5	24	40.9	18	40.4	65	35.8
11 矢状径	4	13.0	0.00	17	13.1	17	13.1	38	12.8	30	13.6	63	12.8
12 横径	4	17.0	1.22	17	16.4	17	17.0	37	17.0	30	17.6	64	16.5
3/2 長厚示数	-	-	-	11	16.8	11	17.5	14	18.7	12	18.3	63	17.0
11/12 骨体断面示数	4	76.8	5.24	17	80.2	17	77.9	37	75.5	30	77.7	63	74.9

表6 上肢の計測値の比較 (女性)

(単位=mm)

Martin No.	砥原 (近世)			福荷谷 (近世)		天福寺 (近世)		原田 (近世)		席田青木 (近世)		九州 (現代)	
	n	M	S.D.	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M
上腕骨													
1 最大長	1	300.0	-	4	268.5	19	273.7	8	260.4	7	284.9	36	271.7
2 全長	-	-	-	5	264.8	15	271.4	5	258.6	5	281	36	268.6
5 中央最大径	3	20.7	1.79	5	19.0	20	20.3	10	19.0	17	21.6	36	19.8
6 中央最小径	3	16.7	1.48	5	15.2	20	15.5	10	14.8	17	16.2	36	14.8
7 骨体最小周	2	57.5	5.35	11	51.4	21	56.0	14	52.9	17	59.1	36	54.8
7a 中央周	3	60.0	4.50	4	52.5	20	59.3	10	56.3	17	62.1	36	56.9
6/5 骨体断面示数	3	80.6	4.53	5	80.1	20	75.9	10	78.0	17	75.2	36	75.3
7/1 長厚示数	1	21.3	-	4	18.8	17	20.7	7	20.2	17	20.8	36	20.2
桡骨													
1 最大長	-	-	-	5	196.2	12	197.9	10	196.4	6	206.2	12	199.9
2 機能長	-	-	-	6	185.2	11	183.5	12	185.2	6	192.8	12	187
3 最小周	1	35.0	-	10	33.4	16	35.7	16	37.8	11	40.2	12	34.7
4 骨体横径	1	15.0	-	12	15.1	16	15.3	18	14.4	15	16.2	12	14.5
4a 骨体中央横径	1	15.0	-	5	13.8	14	14.0	9	13.6	8	15.8	12	13.5
5 骨体矢状径	1	10.0	-	12	10.1	16	10.3	18	9.8	15	11.5	12	9.7
5a 骨体中央矢状径	1	9.0	-	5	10.2	14	10.2	9	10.0	8	11.6	12	9.7
3/2 長厚示数	-	-	-	5	18.4	11	19.4	9	20.0	5	20.8	11	18.1
5/4 骨体断面示数	1	66.7	-	12	67.2	15	67.4	18	68.8	15	71.8	10	68.3
5a/4a 中央断面示数	1	60.0	-	5	74.6	14	73.2	9	73.9	8	73.9	13	73.9
尺骨													
1 最大長	-	-	-	2	212.0	11	211.1	9	215.1	4	223.7	12	215
2 機能長	-	-	-	4	188.3	11	184.3	12	191.5	3	195.7	12	189.2
3 最小周	1	32.0	-	8	30.4	12	32.4	16	36.2	5	36.4	12	32.1
11 矢状径	4	11.0	0.71	13	10.8	17	11.2	18	11.1	17	11.9	12	10.9
12 横径	4	14.8	1.09	13	13.9	17	14.3	18	14.4	17	16.2	12	13.9
3/2 長厚示数	-	-	-	4	15.7	11	17.6	11	18.5	3	18.8	12	16.8
11/12 骨体断面示数	4	74.9	6.42	13	77.5	17	79.0	18	77.2	17	73.7	12	77.5

表7 下肢の計測値の比較(男性)

(単位=mm)

Martin No.	n	祇園原 (近世)		稲荷谷 (近世)		天福寺 (近世)		原田 (近世)		高田青木 (近世)		九州 (現代)	
		M	S.D.	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M
大腿骨													
1 最大長	2	415.0	3.00	9	407.4	20	415.2	19	420.5	31	419.6	59	406.5
2 自然位長	4	407.3	11.78	8	406.5	18	410	13	415.1	13	418.0	59	403.2
6 中央矢状径	8	29.0	2.12	20	28.4	17	27.7	36	28.3	40	28.1	59	26.5
7 中央横径	8	27.9	1.27	21	26.7	17	26.9	36	26.5	40	29.0	59	25.6
8 中央周	9	88.7	3.62	20	84.1	17	85.4	36	86.4	39	89.4	59	82.4
9 骨体上横径	9	33.1	1.45	20	30.6	14	30.4	39	31.7	38	33.8	59	29.4
10 骨体上矢状径	9	24.9	1.10	20	25.7	14	26.3	39	25.8	38	25.7	59	24.3
8/2 長厚示数	4	21.9	0.58	8	21.2	13	20.5	13	20.8	12	21.5	59	20.4
6/7 中央断面示数	8	104.3	9.57	20	106.7	17	104.1	36	107.4	40	97.0	59	103.8
10/9 上骨体断面示数	9	75.4	6.00	20	84.2	14	86.7	39	81.4	38	76.2	58	82.8
胫骨													
1 全長	5	332.0	12.21	10	330.4	13	339.5	19	331.7	21	330.3	61	320.3
1a 最大長	6	335.2	11.25	10	335.5	16	340.1	19	338.4	24	337.0	60	326.9
8 中央最大径	6	28.3	1.25	10	28.7	14	29.4	20	28.8	26	30.2	61	27.8
8a 栄養孔位最大径	6	33.2	1.57	16	34.0	15	33.7	35	33.3	34	34.4	60	30.6
9 中央横径	6	21.7	0.47	10	21.6	14	21.9	20	22.3	26	22.7	61	21.1
9a 栄養孔位横径	6	25.0	0.82	16	24.6	15	24.1	35	24.1	34	24.9	61	23.7
10 中央周	6	79.7	2.36	10	77.2	14	80.4	20	81	25	83.0	62	78.4
10a 栄養孔位周	6	90.7	2.92	14	88.6	15	91.3	35	90.7	32	93.0	61	88.9
10b 最小周	4	73.3	1.79	17	70.6	15	73.7	35	71.8	29	76.0	60	71.3
9/8 中央断面示数	6	76.7	4.38	10	75.6	14	74.8	20	77.8	26	75.4	61	76.1
9a/8a 栄養孔断面示数	6	75.6	4.50	16	72.4	15	71.9	35	72.8	34	72.3	60	77.5
10b/1 長厚示数	4	22.0	0.95	10	21.1	8	21.3	19	21.8	19	23.0	60	22.4
腓骨													
1 全長	-	-	-	7	332.0	12	335.3	10	327.6	6	333.0	58	322.9
2 中央最大径	4	14.3	1.09	6	15.3	13	14.3	17	14.6	24	15.2	59	14.5
3 中央最小径	4	11.5	2.06	6	11.0	13	10.8	17	10.9	24	11.2	59	10
4 中央周	4	41.5	4.77	6	41.2	13	40.5	17	42.7	24	43.7	59	41.5
4a 最小周	2	33.0	2.00	7	34.9	10	35.9	28	37.9	14	38.0	59	35.6
3/2 中央断面示数	4	80.3	10.13	6	72.3	13	75.5	17	75.2	24	74.2	59	69.5
4a/1 長厚示数	-	-	-	7	10.5	7	11.1	10	11.7	6	11.1	58	11.1

表8 下肢の計測値の比較(女性)

(単位=mm)

Martin No.	n	祇園原 (近世)		稲荷谷 (近世)		天福寺 (近世)		原田 (近世)		高田青木 (近世)		九州 (現代)	
		M	S.D.	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M
大腿骨													
1 最大長	-	-	-	8	382.0	18	380.6	12	382.8	15	389.1	13	380.1
2 自然位長	-	-	-	8	376.9	16	376.7	8	378.8	5	388.4	13	375.9
6 中央矢状径	4	23.8	0.83	15	24.3	21	23.6	27	24.1	25	24.8	13	23.6
7 中央横径	4	27.3	1.48	15	24.5	21	24.0	27	24.3	25	26.6	13	23.2
8 中央周	3	75.7	1.70	16	74.6	21	75.2	27	75.7	23	80.5	13	74.2
9 骨体上横径	3	30.3	1.25	14	28.7	17	27.7	31	28.8	25	30.2	13	27.5
10 骨体上矢状径	3	20.7	0.47	14	21.6	17	22.7	31	22.4	25	23.0	13	21.3
8/2 長厚示数	-	-	-	8	19.3	15	19.8	7	20.6	3	21.2	13	19.8
6/7 中央断面示数	4	87.4	5.19	15	99.4	21	98.7	27	99.7	25	93.6	13	102.0
10/9 上骨体断面示数	3	68.2	1.87	14	75.4	17	82.3	31	78.0	25	77.0	13	77.1
胫骨													
1 全長	2	298.5	0.50	7	303.1	15	301.8	13	304.8	8	309.1	14	301.0
1a 最大長	2	303.5	1.50	7	307.6	15	305.6	18	306.4	10	314.0	14	306.6
8 中央最大径	3	26.0	0.82	7	25.3	17	24.4	15	24.5	10	26.1	14	24.7
8a 栄養孔位最大径	3	29.3	2.05	12	28.8	19	27.8	24	28.0	19	29.5	14	28.1
9 中央横径	3	18.3	1.25	7	17.9	17	18.6	16	19.0	10	20.1	14	18.8
9a 栄養孔位横径	2	21.0	0.00	12	20.0	19	20.7	23	20.7	19	21.6	14	21.1
10 中央周	3	68.7	2.87	7	66.7	17	67.5	15	69.5	9	72.2	14	70.1
10a 栄養孔位周	2	75.0	2.00	11	76.1	19	76.5	22	77.8	19	80.6	14	78.2
10b 最小周	3	64.7	3.68	13	60.4	17	62.7	24	62.3	15	66.1	14	63.6
9/8 中央断面示数	3	70.4	2.62	7	70.8	17	76.9	15	78.2	10	77.1	14	76.3
9a/8a 栄養孔断面示数	2	75.1	2.68	12	69.6	19	75.0	23	74.3	19	73.5	14	74.9
10b/1 長厚示数	2	20.9	0.87	7	19.9	14	21.2	11	20.4	6	21.4	14	21.2
腓骨													
1 全長	-	-	-	4	298.0	6	300.0	9	301.4	2	323.0	14	300.6
2 中央最大径	3	14.0	0.00	4	13.0	11	12.8	11	12.2	7	15.1	14	12.9
3 中央最小径	3	11.7	0.47	4	9.0	11	9.2	11	9.5	7	11.3	14	8.6
4 中央周	2	42.0	0.00	4	34.8	11	36.6	11	37.1	7	42.7	14	36.8
4a 最小周	2	38.5	0.50	5	29.4	8	32.9	15	33.9	5	34.2	14	32.3
3/2 中央断面示数	3	83.3	3.37	4	69.8	11	71.9	11	77.8	7	74.8	14	67.6
4a/1 長厚示数	-	-	-	4	10.1	5	11.0	8	11.0	2	11.0	10	10.8

表9 主成分分析の固有ベクトル (男性)

	第1主成分	第2主成分
1 頭蓋最大長	-0.3477	0.0246
8 頭蓋最大幅	0.2082	0.2183
17 Ba-Br高	0.3203	-0.0140
45 頬骨弓幅	-0.1937	0.5288
46 中顔幅	-0.3719	0.2019
48 上顔高	0.1570	0.4625
51 眼窩幅	0.1523	0.4684
52 眼窩高	0.4692	0.1490
54 鼻幅	-0.3178	0.4070
55 鼻高	0.4340	0.1003
固有値	3.72	2.70
累積寄与率 (%)	37.25	64.21

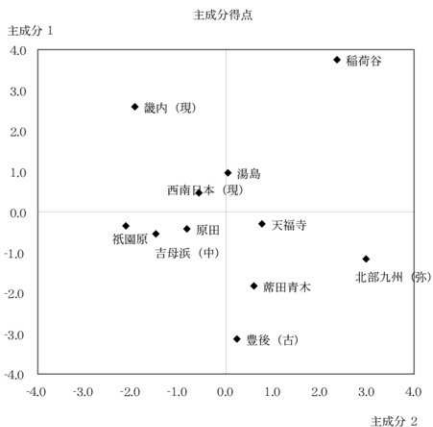
表10 主成分分析の固有ベクトル (女性)

	第1主成分	第2主成分
1 頭蓋最大長	0.1882	0.5613
8 頭蓋最大幅	0.3945	-0.1336
17 Ba-Br高	0.3808	0.0033
46 中顔幅	0.1289	0.5532
48 上顔高	0.4746	0.0533
51 眼窩幅	0.4331	-0.0720
52 眼窩高	0.1772	-0.5634
54 鼻幅	0.0328	0.1801
55 鼻高	0.4495	-0.0572
固有値	3.11	2.56
累積寄与率 (%)	34.57	63.02

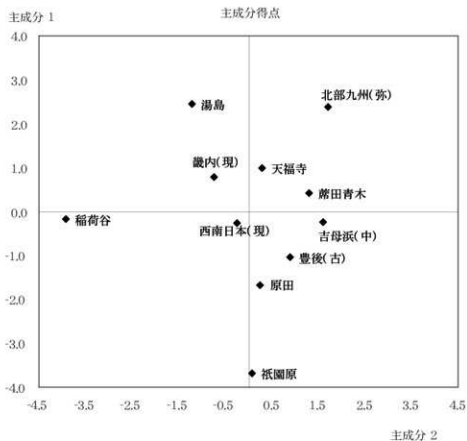
表11 身長と比較

(単位=cm)

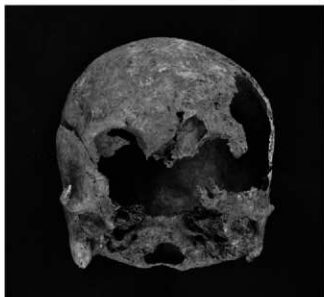
	n	M
祇園原 14号 (近世)	-	159.9
40号	-	158.8
稲荷谷 (近世)	12	158.2
天福寺 (近世)	24	159.4
原田 (近世)	30	160.1
席田青木 (近世)	30	160.3
西南日本 (現代)	37	157.7



第 4 図 主成分分析 (男性、10項目)



第 5 図 主成分分析 (女性、9項目)



① 1号頭蓋骨 (正面観)



④ 2号頭蓋骨 (正面観)



③ 1号頭蓋骨 (上面観)



⑤ 2号頭蓋骨 (側面観)



⑥ 2号頭蓋骨 (上面観)



① 3号頭蓋骨 (正面観)



④ 14号頭蓋骨 (正面観)



② 3号頭蓋骨 (側面観)



⑤ 14号頭蓋骨 (側面観)



③ 3号頭蓋骨 (上面観)



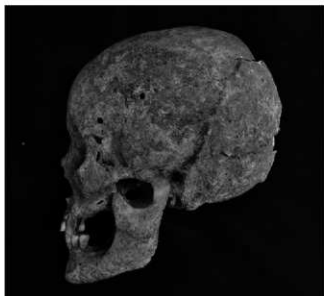
⑥ 14号頭蓋骨 (上面観)



①24号頭蓋骨 (正面観)



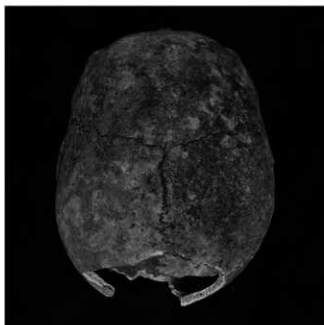
④37号頭蓋骨 (正面観)



②24号頭蓋骨 (側面観)



⑤37号頭蓋骨 (側面観)



③24号頭蓋骨 (上面観)



⑥37号頭蓋骨 (上面観)



①40号頭蓋骨 (正面観)



④41号頭蓋骨 (正面観)



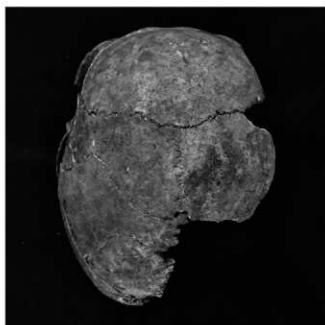
②40号頭蓋骨 (側面観)



⑤41号頭蓋骨 (側面観)



③40号頭蓋骨 (上面観)



⑥41号頭蓋骨 (上面観)



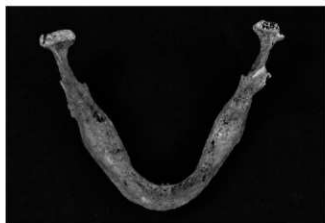
①24号頭蓋骨 (正面観)



④11号下顎



⑤15号下顎



②1号下顎



⑥25号下顎



③9号下顎



⑦39号下顎



① 1号上肢骨



③ 2号下肢骨



② 2号上肢骨



④ 3号下肢骨



①4号下肢骨



③9号下肢骨



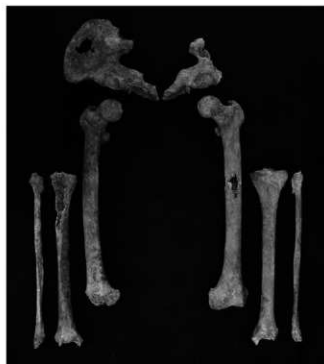
②9号上肢骨



④11号上肢骨



①11号下肢骨



③14号下肢骨



②14号上肢骨



④15号下肢骨



①20号上肢骨



③39号上肢骨



②20号下肢骨



④39号下肢骨



①40号上肢骨



③41号上肢骨



②40号下肢骨



④41号下肢骨



①550号上肢骨



③51号下肢骨



②50号下肢骨



①14号肋骨・胸骨由癒合



④51号椎骨リップング



②41号下腿遠位部骨膜炎



③51号大臑小骨結節

(3) 小結

墓石の記録と概要で報告したとおり、調査区からは55基の墓が発見され、うち54基は調査区南端の丘陵頂部でまとまって検出されている。したがって、本節では、このまとまって検出された墓に関することについてまとめてみることにしたい。

今回の調査で得られた情報は

- (1) 墓坑の形態には長方形型と正方形型の2種類があった。
- (2) 墓坑の中からは時期のわかる遺物の出土はなかったが、かなりの割合でクギや人骨がそれぞれから出土した。
- (3) 墓坑同士の切り合いが少なく、墓の立地にある程度規則性が見受けられた。
- (4) 調査前の段階で墓に伴うと考えられる墓石が10基存在しており、それには年号や人物名などが刻まれていた。また、墓石に用いられた石材や墓標の形態にいくつか違いが見られた。
- (5) 墓の所有者や縁故者の存在が確認される。

などである。

(1)については、54基のうち底面の形が長方形型のもが35基、正方形型のもが19基で割合的には長方形型が多い。切り合い関係では正方形型のもが長方形型をいずれも切っており、ここでは長方形型が古く、正方形型が新しい。

(2)については、54基のうち18基からクギが出土しており、このことから木棺を使用されていたことがうかがわれる。また、クギが出土していなくても、26号墓のように箱型の棺の形が推定できたものもあることから大半は木棺墓であったと考えられる。人骨については、54基のうち39基から人骨が検出された。出土状況から、寝棺(屈葬)と座棺(座葬)に区分され、その配置を示したものが第6図である。寝棺が14基、座棺が15基、不明10基であった。棺の型からみると長方形型に寝棺が多い一方、正方形型に座棺が多い。棺の形や大きさを意識しての掘り方となったためと考えられる。この人骨の調査結果については、(2)節のとおり九州大学田中良之先生をはじめとする諸先生方の所見に委ねることにする。

(3)については、長方形型の墓坑を持つ墓を中心に、ある程度方向を揃える形で並んでつくられていることがわかる。その配置から考えて下図のとおり4つのグループに分けることができそうである。

(4)については、最も古いもので4号墓石の正徳四年(1714年)、新しいもので10号墓石の文化四年(1807年)である。したがって少なくとも100年近くは墓がつくられ続けてきたことがわかる。また、人物名は「小西半右衛門」「小西勘助」と刻まれた2基があり、それ以外の8基は法名が刻まれている。この「小西」という姓を持つ人は現在遺跡のある周辺地域には存在しない。しかし地名としては、調査区のすぐ東にある平島集落の北側一帯に「小西」という小字が残っている。法名については、墓に関係する寺が火事で消失したことにより過去帳が失われており、被葬者の特定はできない。墓石には安山岩製と凝灰岩製などが見られたが、大部分はこの地域で産出される凝灰岩を使っている。墓標の形態は、板碑の流れを受けた頂部「△」型になっているものが2号・4号・7号、「断面カマボコ」型になっているものがそれ以外の7基である。日田地域の近世の墓標は後者の例が多いとおもわれるが、前者と後者の違いが時代的な特徴を持つものか、この地域の特徴なのかどうかは今後の調査例を待ちたい。また、墓石の数が遺構数に比べて少ないが、調査前の状況で地表面に自然石を置いていたものや遺構掘り下げ

途中で木片が出土したのもあったこと、墓坑同士の切り合いが少ないことなどから石材以外のものを用いて墓標としていたことが想定できる。

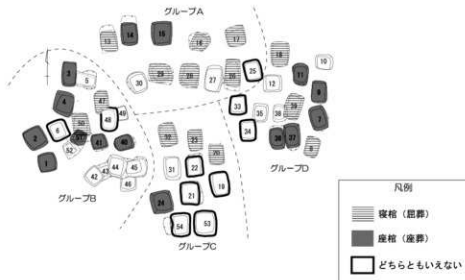
(5)については、調査時の墓地の所有者は酒井安男氏で、管理は平島集落の菅田初夫氏であった。墓の調査にあたっては、菅田初夫氏の協力により酒井家のご理解をいただき、今回の人骨分析調査を行えたことから、菅田初夫氏に菅田家と酒井家の関係などについてお話をうかがった。(以下「」は菅田初夫氏のお話の中から要点のみ掲載させていただきます。)



「菅田家と酒井家は家系図に見るように菅田初夫と酒井安男の祖父が兄弟であり、祖父の酒井卯吉が菅田家へ養子に行き、酒井家の分家となっている。その酒井家は、もともと平島集落の出自で、大字東有田字杉園に居宅を構えていた。酒井家の先祖である兼助は、江戸時代末から寺小屋を営み、その土地の名をとって杉園半路と名乗っていた。寺子屋には100人近くの門下生があり、明治15年に死去したときには門下生により寺子屋のあった一角に墓が建てられ、墓所の土台には門下生たちの名が刻まれている。兼助の孫虎五郎のときに平島集落にあった土地を手放し豆田町に移り住むことになった。」

「子どもの頃は、墓所以外には祇園原遺跡のある土地のほとんどは酒井家が所有していたほか、平島集落周辺では、字杉園(平島集落の南側の小高い場所一部)や現在の有田小学校のある場所にも土地を広く所有していた。」

菅田初夫氏の話などから、①墓所の所有者が昔から酒井家であったこと、②墓標に刻まれている「小西半右衛門」「小西勘助」の小西という名が平島集落の中に存在していること、③酒井家の祖先の名が墓標に刻まれている「小西勘助」の助の字を使っていること、④酒井兼助が寺小屋と居宅があった土地名を使って杉園半路と自ら名乗っているケースがあることなどから推測すると、祇園原遺跡の近世墓は江戸時代における酒井家の累代の墓地として考えて間違いなさそうである。



※(2)節 出土人骨の埋葬姿勢を参考に作成

第6図 墓群グループ配置図 (1/200)

なお、今回の調査にあたりましては、墓地の関係者である酒井安男氏、菅田初夫氏、そして九州大学大学院比較社会文化研究院基層構造講座の皆様方及び発掘調査に参加された各氏には、快く調査にご協力いただき、心より感謝申し上げます。



①近世墓調査前風景 1



②近世墓調査前風景 2



③近世墓調査前風景 3



④近世墓調査前風景 4



⑤近世墓調査前風景 5



⑥近世墓調査前風景 6



⑦近世墓遺構検出状況



⑧近世墓遺構検出状況



① 1号墓石



② 1号墓石侧面



③ 2号墓石



④ 3号墓石



⑤ 4号墓石



⑥ 5号墓石



⑦ 6号墓石



⑧ 7号墓石



① 8号墓石



② 9号墓石



③ 10号墓石



④ 10号墓石側面



① 1号墓人骨出土状況



② 2号墓完掘状況



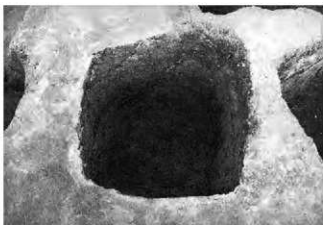
③ 2号墓人骨出土状況



④ 3号墓完掘状況



⑤ 3号墓人骨出土状況



⑥ 4号墓完掘状況



⑦ 4号墓人骨出土状況



⑧ 5号墓完掘状況



① 6号墓完掘状況



② 6号墓人骨出土状況



③ 7号墓完掘状況



④ 7号墓人骨出土状況



⑤ 8号墓完掘状況



⑥ 8号墓人骨出土状況



⑦ 9号墓完掘状況



⑧ 9号墓人骨出土状況

写真図6



①10号墓完掘状況



②11号墓完掘状況



③11号墓人骨出土状況



④12号墓完掘状況



⑤13号墓完掘状況



⑥13号墓人骨出土状況



⑦14号墓完掘状況



⑧14号墓人骨出土状況



①15号墓完掘状況



②15号墓人骨出土状況



③16号墓完掘状況



④16号墓人骨出土状況



⑤17号墓完掘状況



⑥17号墓人骨出土状況

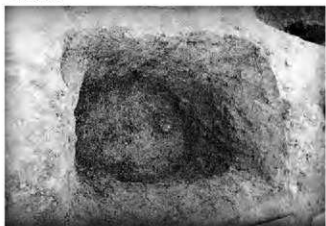


⑦18号墓完掘状況



⑧18号墓人骨出土状況

写真図8



①19号墓完掘状況



②19号墓人骨出土状況



③20号墓完掘状況



④20号墓人骨出土状況



⑤21号墓完掘状況



⑥21号墓人骨出土状況



⑦22号墓完掘状況



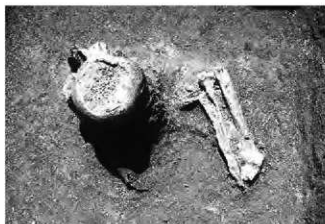
⑧23号墓完掘状況



①23号墓人骨出土状况



②24号墓完掘状况



③24号墓人骨出土状况



④25号墓完掘状况



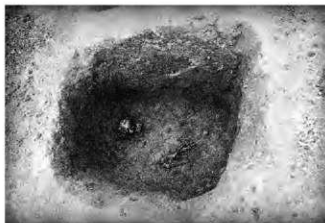
⑤25号墓人骨出土状况



⑥26号墓完掘状况



⑦27号墓完掘状况



⑧28号墓完掘状况



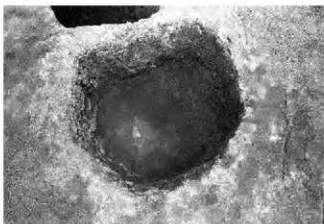
①28号墓人骨出土状况



②29号墓完掘状况



③29号墓人骨出土状况



④30号墓完掘状况



⑤31号墓完掘状况



⑥32号墓完掘状况



⑦32号墓人骨出土状况



⑧33号墓完掘状况



①33号墓人骨出土状況



②34号墓完掘状況



③34号墓人骨出土状況



④35号墓完掘状況



⑤36号墓完掘状況



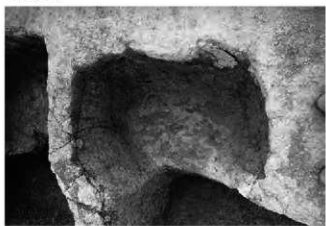
⑥36号墓人骨出土状況



⑦37号墓完掘状況



⑧37号墓人骨出土状況



①38号墓完掘状况



②38・39号墓



③39号墓完掘状况



④39号墓人骨出土状况



⑤40号墓完掘状况



⑥40号墓人骨出土状况



⑦41号墓完掘状况



⑧41号墓人骨出土状况



①42から46号墓



②47号墓完掘状況



③48号墓完掘状況



④48号墓人骨出土状況



⑤49号墓完掘状況



⑥50号墓完掘状況



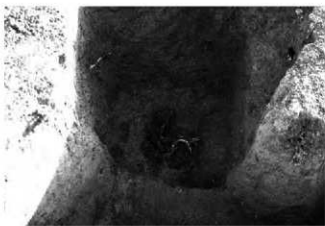
⑦50号墓人骨出土状況



⑧51号墓完掘状況



①51号墓人骨出土状况



②52号墓完掘状况



③52号墓人骨出土状况



④53号墓完掘状况



⑤53号墓人骨出土状况



⑥54号墓完掘状况



⑦54号墓人骨出土状况

報告書抄録

ふりがな	ぎおんばるいせきⅡ（きんせいほへん2）
書名	祇園原遺跡Ⅱ（近世墓編2）
副書名	ウッドコンビナート建設推進事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	7
シリーズ名	日田市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第101集
編著者名	渡邊隆行、高橋浩史、舟橋京子、谷澤亜里、早川和賀子、米元史織、岩橋由季、李ハヤン、田中良之、行時志郎
編集機関	日田市教育庁文化財保護課
所在地	〒877-0077 日田市南友田町516-1 0973-24-7171
発行年月日	2011年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	発掘期間	発掘面積	発掘原因
		市町村	遺跡番号					
ぎおんばるいせき 祇園原遺跡	おおいのけんこうたし 大分県日田市大字 のりありたあび 東有田字ギオン ぼる 原	44204-6	204222	33°18'43"	130°58'04"	19960307 ～ 19961003	9,828㎡	ウッドコンビナート建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
祇園原遺跡	墓地	近世	近世墓 55基	人骨	墓石10基あり

要約	調査では、丘陵の微高地に集中して営まれた54基の近世墓と、弥生時代中期末から後期前半の竪穴住居を切る1基の近世墓が確認された。墓坑内部からは総数40体の人骨が出土しており、座葬や屈葬などが確認されたものの、副葬品を持つものは見られなかった。墓坑の配置を見ると数グループに分けられそうで、墓坑が切りあう一群と切りあわない一群などの差が看取できる。
-----------	--

祇園原遺跡Ⅱ（近世墓編2）

日田市埋蔵文化財報告書第101集

2011年3月31日

編集	日田市教育庁 文化財保護課 〒877-0077 大分県日田市南友田町516-1
発行	日田市教育委員会 〒877-8601 大分県日田市田島2丁目6-1
印刷	尾花印刷株式会社 〒877-0026 大分県日田市田島本町8-8



日 田 市